北埋調報　164

八雲町

野田生５遺跡

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成12年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

八雲町

野田生５遺跡

―北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成12年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

発掘前風景（西から）

調査状況（北西から）

口絵2

遺物出土状況（南西から）

遺物出土状況（東から）

例言

1．本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成12年度に実施した八雲町野田生５遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。

2．調査は、第２調査部第１調査課が担当した。

3．本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章坂本尚史、Ⅳ章中田裕香・坂本尚史、Ⅴ章中田裕香・坂本尚史が担当し、全体の編集は坂本尚史が担当した。

4．遺物の整理は、土器を中田裕香、石器を坂本尚史が担当した。

5．調査での写真撮影は坂本尚史が、室内での遺物の撮影は菊地慈人が担当した。

6．報告書刊行後、出土資料および記録類は八雲町教育委員会が保管する。

7．調査にあたっては下記の諸機関、諸氏にご協力、ご指導を頂いた。

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、八雲町郷土資料館　三浦孝一・柴田信一・横山英介・菊地博、七飯町教育委員会　石本省三、青森市教育委員会　児玉大成、函館市教育委員会　田原良信・野村祐一・野辺地初雄、市立函館博物館　長谷部一弘、市立函館博物館五稜郭分館　佐藤智雄、松前町教育委員会　久保泰・前田正憲、知内町郷土資料館　高橋豊彦、木古内町教育委員会　菅野文二・大谷内愛史・木元豊・三上英則・山田央、上磯町教育委員会　森靖裕、戸井町教育委員会　鈴木正語、南茅部町教育委員会　阿部千春・福田裕二、南茅部町埋蔵文化財調査団　佐々木日登美、森町教育委員会　藤田登、長万部町教育委員会　佐藤稔・大根田雅美、上ノ国町教育委員会　松崎水穂・斉藤邦典・三浦秀俊・松田輝哉、乙部町教育委員会　森広樹・藤田巧、奥尻町歴史民俗資料館　木村哲朗、北檜山町教育委員会　谷岡康孝、今金町教育委員会　寺崎康史、苫小牧市埋蔵文化財調査センター　佐藤一夫・赤石慎三、伊達市教育委員会　大島直行・青野友哉・小島朋夏、虻田町教育委員会　角田隆志、平取町　森岡健治・長田佳宏、竹花和晴、千歳市教育委員会　乾哲也、青森県埋蔵文化財調査センター　木村高、秋田県埋蔵文化財センター　小杉克、滝沢村教育委員会　井上雅孝、早稲田大学　菊地徹夫、筑波大学　福田正宏、帝京大学　阿部朝衛

凡例

1．遺構、石器ブロックは本文中および図、表中では以下の記号を用いて表した。原則として確認順に番号を付し、記号と番号の間には発掘区名と区別するためハイフンを挿入した。

　Ｐ：土坑　Ｆ：焼土　Ｃｂ：炭化木片ブロック　ＦＫ：フレイク集中　Ｓｂ：石器ブロック

2．遺構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は原則として40分の１である。遺構平面図交点傍らの名称記号は右下の区画を示している。交点の表記がないものは傍らにグリッド概略図を設けて確認地点を示した。遺構平面図の小数字は標高（単位m）である。

3．平面分布図における遺物のシンボルマークの内容については、各図に凡例を設け示した。

4．遺構の規模は「確認面の長軸の上端／下端×確認面の短軸の上端／下端×確認面からの最大深・最大厚」を単位cmで示してある。なお、一部破壊されているものは（　）で示した。

5．土層名は下記の記号を用いた場合がある。

　Ｋｏ-ｄ：駒ケ岳-ｄ火山灰

　Ｋｏ-ｇ：駒ケ岳-ｇ火山灰

　火山灰の略号は、北海道火山灰命名委員会（1982）『北海道の火山灰』による。

6．遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、スケールが入っているもの以外は原則として以下のとおりである。土器・礫石器：３分の１　剥片石器・磨製石斧：２分の１

7．遺物写真図版の縮尺は打製石器と磨製石斧が２分の１、礫石器が３分の１、土器は破片資料が等倍、復元個体に関しては図版ごとに示した。

8．石器の計測は「長×幅×厚」で、図Ｉ－12のように行った。厚さは最大値を採用している。剥片石器のうち、スクレイパーやＲフレイクなどの不定形なものについては素材長軸を石器の長軸とした。また礫石器は最長部を長さ、直交する最長部を幅として計測した。なお、実測図中で敲打痕はＶ―Ｖ、すり痕は ⊢⊣ で範囲を表した。

目次

例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ　調査の概要
　1　調査要項 …… 1
　2　調査体制 …… 1
　3　調査に至る経緯 …… 1
　4　調査の概要 …… 1
　　(1)　発掘区の設定 …… 1
　　(2)　基本層序 …… 3
　　(3)　調査の方法 …… 10
　　(4)　整理の方法 …… 10
　　(5)　遺物の分類 …… 12
　　(6)　調査結果の概要 …… 14
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の位置と周辺の地形 …… 17
　2　野田生地区周辺の遺跡 …… 17
Ⅲ　遺構と出土遺物
　1　概要 …… 21
　2　Ｔピット …… 21
　3　土壙 …… 22
　4　焼土・炭化木片ブロック …… 25
　5　フレイク集中 …… 27
Ⅳ　包含層出土の遺物
　1　概要 …… 29
　2　土器 …… 29
　3　石器 …… 34
　4　遺物の分布 …… 41
　　(1)　概要 …… 41
　　(2)　土器 …… 43
　　(3)　石器 …… 43
Ⅴ　調査の成果と課題
　1　縄文土器について …… 49
　2　石器について …… 51
引用・参考文献 …… 57
遺構一覧表・掲載遺物一覧表 …… 61
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図Ⅰ－1　調査範囲と周辺の地形 …… 2
図Ⅰ－2　発掘区設定図 …… 2
図Ⅰ－3　土層断面図 (1) …… 4
図Ⅰ－4　土層断面図 (2) …… 5
図Ⅰ－5　土層断面図 (3) …… 6
図Ⅰ－6　土層断面図 (4) …… 7
図Ⅰ－7　土層断面図 (5) …… 8
図Ⅰ－8　土層断面図 (6) …… 9
図Ⅰ－9　遺跡現況図 …… 11
図Ⅰ－10　発掘区の変更範囲 …… 11
図Ⅰ－11　旧石器確認調査範囲 …… 11
図Ⅰ－12　石器の計測箇所 …… 15
図Ⅰ－13　遺構配置図 …… 16
図Ⅰ－14　遺物分布図 …… 16
図Ⅱ－1　野田生5遺跡と周辺の遺跡 …… 18
図Ⅱ－2　遺跡の範囲と周辺の地形 …… 18
図Ⅱ－3　野田生地区周辺の遺跡 …… 19
図Ⅲ－1　Tピット・土壙 …… 23
図Ⅲ－2　焼土・炭化木片ブロック …… 24
図Ⅲ－3
炭化木片ブロック・フレイク集中 …… 28
図Ⅳ－1　包含層出土の土器 (1) …… 30
図Ⅳ－2　包含層出土の土器 (2) …… 32
図Ⅳ－3　包含層出土の石器 (1) …… 35
図Ⅳ－4　包含層出土の石器 (2) …… 36
図Ⅳ－5　包含層出土の石器 (3) …… 39
図Ⅳ－6　包含層出土の石器 (4) …… 40
図Ⅳ－7　包含層出土の石器 (5) …… 42
図Ⅳ－8　包含層出土土器の分布 …… 44
図Ⅳ－9　包含層出土土器の接合状況 …… 45
図Ⅳ－10　石材別分布状況 …… 47
図Ⅳ－11　石器（トゥール）の分布 …… 47
図Ⅳ－12　器種別分布状況 …… 48
図Ⅴ－1　ピエス・エスキーユ分類模式図 …… 53
図Ⅴ－2　ピエス・エスキーユ長幅比 …… 53
図Ⅴ－3
ピエス・エスキーユ断面形状の分類 …… 53
図Ⅴ－4
ピエス・エスキーユ断面形別点数 …… 53
図Ⅴ－5
ピエス・エスキーユの石材別比率 …… 53
図Ⅴ－6　玉髄の器種別比率 …… 53

表目次

表Ⅰ－1　出土遺物点数・重量一覧 …… 15
表Ⅰ－2　石器器種別点数・重量一覧 …… 15
表Ⅰ－3　石器石材別点数・重量一覧 …… 15
表Ⅳ－1　包含層出土土器一覧 …… 44
表Ⅴ－1　ピエス・エスキーユ刃部角と長さの点数一覧 …… 53
表Ⅴ－2　器種及び石材別点数一覧 …… 53
表1　確認遺構一覧 …… 61
表2　包含層出土復原土器一覧 …… 61
表3　包含層出土掲載土器一覧 …… 62
表4　包含層出土掲載石器一覧 …… 63

図版目次

図版1　1．発掘前風景（西から）
2．調査状況（北西から）
図版2　1．土層堆積状況（北東から）
2．遺構調査状況　（南から）
3．TP-1・P-19検出状況（南から）
4．TP-1土層堆積断面（南から）
図版3　1．TP-1完掘状況（南から）
2．P-19土層断面（東から）
3．P-19完掘状況（西から）
4．P-12検出状況（東から）
5．P-12土層断面（南東から）
6．P-12完掘状況（東から）
図版4　1．P-5土層断面（北西から）
2．P-5完掘状況（南東から）
3．P-4完掘状況（南東から）
4．F-1検出状況（北西から）
5．F-1土層断面（南東から）
6．Cb-5検出状況（東から）
図版5　1．M・N56区遺物出土状況（北から）
2．M・N56区遺物出土状況（南から）
図版6　1．N57区フレイク集中　（南から）
2．L65区遺物出土状況
（Ⅵ群土器・玉髄原石）（東から）
図版7　1．K65区遺物出土状況（Ⅵ群土器）
（南西から）
2．M66区遺物出土状況（南から）
図版8　1．遺構出土土器
2～4．包含層出土土器（1）
図版9　包含層出土土器（2）
図版10　包含層出土土器（3）
図版11　包含層出土土器（4）
図版12　包含層出土土器（5）
図版13　包含層出土土器（6）
図版14　包含層出土土器（7）
図版15　包含層出土土器（8）
図版16　包含層出土土器（9）
図版17　石鏃、石槍、掻器、スクレイパー、
Rフレイク
図版18　ピエス・エスキーユ、石核
図版19　1．接合1005
2．接合1002
3．接合1006
4．接合1001
5．原石、石斧
図版20　すり石、石皿・台石

Ⅰ　調査の概要

1　調査要項

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
受 託 者：財団法人　北海道埋蔵文化財センター
調査期間：平成12年５月８日～平成12年８月14日
遺 跡 名：野田生５遺跡（道教委登載番号　Ｂ－16－51）
所 在 地：山越郡八雲町野田生303ほか
調査面積：2,230㎡

2　調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

理　事　長	大澤　潤
専 務 理 事	宮崎　勝
常 務 理 事	木村　尚俊
総 務 部 長	柳瀬　茂樹
第２調査部長	鬼柳　彰
第１調査課長	種市　幸生（発掘担当者）
主　　任	中田　裕香
文化財保護主事	坂本　尚史（発掘担当者）

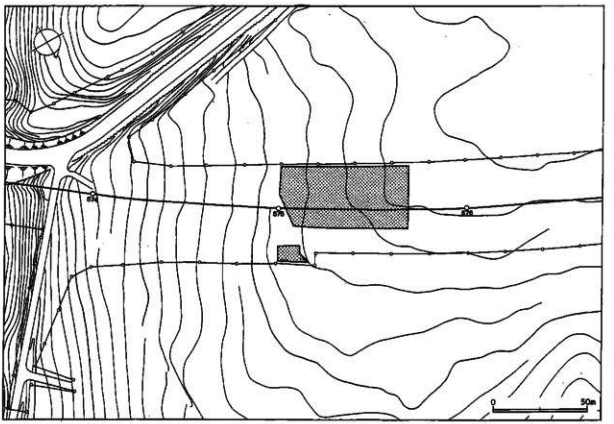
3　調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は函館市を起点として室蘭・苫小牧・札幌市を経由し、名寄市に至る総延長488キロの路線で、このうち長万部～旭川鷹栖間は既に供用されている。七飯～長万部間の路線については平成５年11月から事業が進められている。この事業に対する埋蔵文化財調査については平成２年４月、日本道路公団北海道支社から事前協議がなされ、協議を受けた北海道教育委員会は平成２年４月および平成７年11月に所在確認調査を、平成７年10月以降、順次範囲確認調査を実施した。野田生５遺跡については、平成７年10月に範囲確認調査が実施され、発掘調査の必要な面積3,900㎡が提示されたが、工事計画の変更に伴い発掘調査面積は2,400㎡に決定された。野田生５遺跡は函館工事事務所管内にかかり、遺跡の所在する野田生地区のほか、山越・落部・栄浜地区の調査は今年度から着手されている。同地区で今年度発掘調査が実施された遺跡は、山越２遺跡・山越３遺跡・山越４遺跡・野田生１遺跡・野田生２遺跡・野田生４遺跡・野田生５遺跡・栄浜１遺跡（北海道埋蔵文化財センター）、旭丘１遺跡・浜松３遺跡・栄浜３遺跡（八雲町教育委員会）がある。

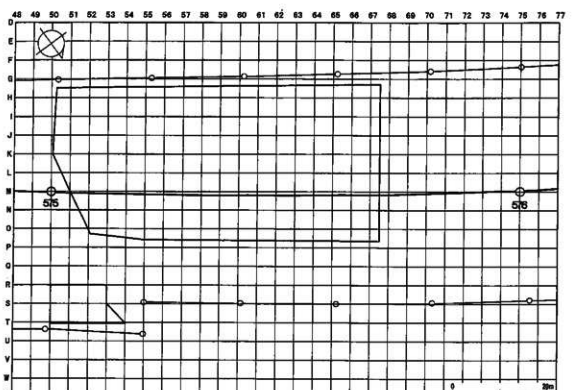
4　調査の概要

(1)　発掘区の設定

発掘区はアルファベットの大文字と数字の組み合わせで表示し、規格は４ｍ×４ｍとした。設定の基準は、工事測点のＳＴＡ.575とＳＴＡ.576の二つの基準点を通る直線を北西－南東方向の基線とし、



図Ⅰ－1　調査範囲と周辺の地形



図Ⅰ－2　発掘区設定図

北東－南西方向は基準点を通り、基線に直交する直線とした。ライン設定は、北西－南東方向をアルファベットの大文字とし、基線をMラインに設定後、北東側にN、O、P、Q、R…と進行し、南西側には逆にL、K、J、I、H…とした。北東－南西方向は数字とし、ＳＴＡ.575を通る直線を50とし、北西側に51、52、53、54…、南東側は逆に49、48、47、46…と進行した。基準点の測量成果は下記のとおりである。

ＳＴＡ.575　　Ｘ＝197,978.4372　　Ｙ＝9,639.9431

ＳＴＡ.576　　Ｘ＝197,938.0704　　Ｙ＝9,548.4795

発掘区の名称は、４ｍ四方の区画の南側隅のライン交点で示した。例えば、基線Mラインと基準点ＳＴＡ.575を通る50ラインの交点の北側の区画はM50区となる（図Ｉ－２）。

(2)　基本層序

土層断面の観察を北西－南東方向と直交する北東－南西方向で行い、Ｈライン、Ｏライン、Ｔライン、60ラインで土層断面図を作成・記録した。遺跡は河岸段丘上の比較的平坦な地形に立地するため、各ラインともほぼ同様な堆積状況を示していた。以下図Ｉ－３～８にしたがって基本層序を述べる。

Ⅰ　層：黒褐色土。表土、耕作土である。耕作による攪拌を受け、Ⅱ層（Ｋｏ-ｄ）が混じる。

Ⅱ　層：黄褐色火山灰層。駒ケ岳起源のＫｏ-ｄとみられる。噴出年代は1640年とされる。耕作により削平され、発掘区内では基本的に確認できなかった。

Ⅲａ層：黒色土。腐植土層で粘性・しまり共に強く、粒子が緻密である。耕作により削られ、部分的に認められる程度である。遺物包含層。

Ⅲｂ層：暗褐色土。粘性は強く、しまりもやや強い。Ⅲａ層に比べやや粗粒である。層厚は15～30㎝ほどである。遺物包含層。

Ⅳ　層：暗黄褐色土。粘性・しまり共にやや強い。ソフトロームを主体に暗褐色土が斑状に混じる、いわゆる漸移層。層厚は10～20㎝ほどである。遺物包含層。

Ⅴ　層：黄褐色ローム。粘性・しまり共に強い。20～30㎝程の厚さでソフトロームが堆積し、下層には硬化するロームが続く。

なお、図Ｉ－３～８中に示した１～５までのアラビア数字による表記は、基本土層以外の以下の細分層序の内容を示している。

１：暗黄褐色土。黒色土が混じる。

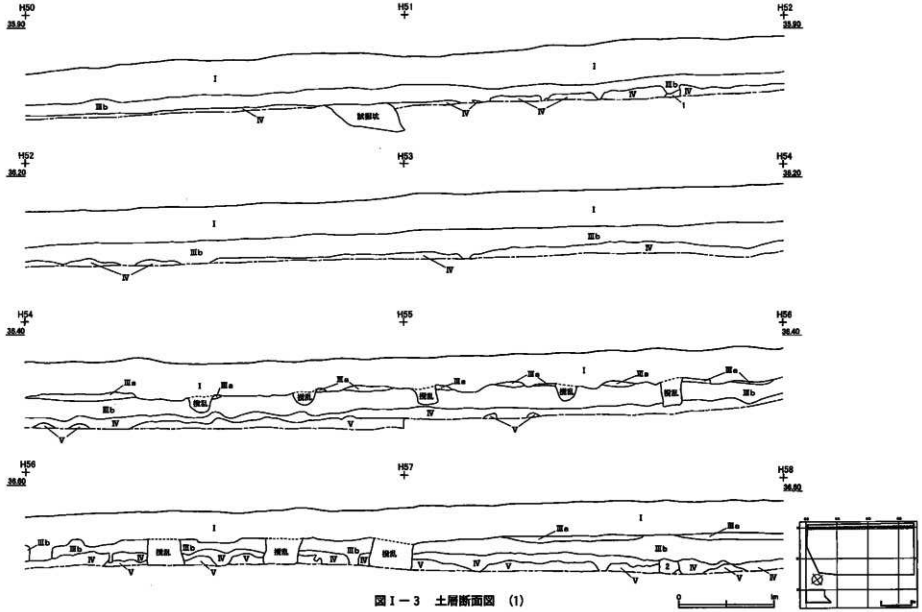
２：黒褐色土。黄褐色土の小ブロックが混じる。

３：暗褐色土。しまり中。粘性弱。黒色土中に若干ローム粒が混じる。

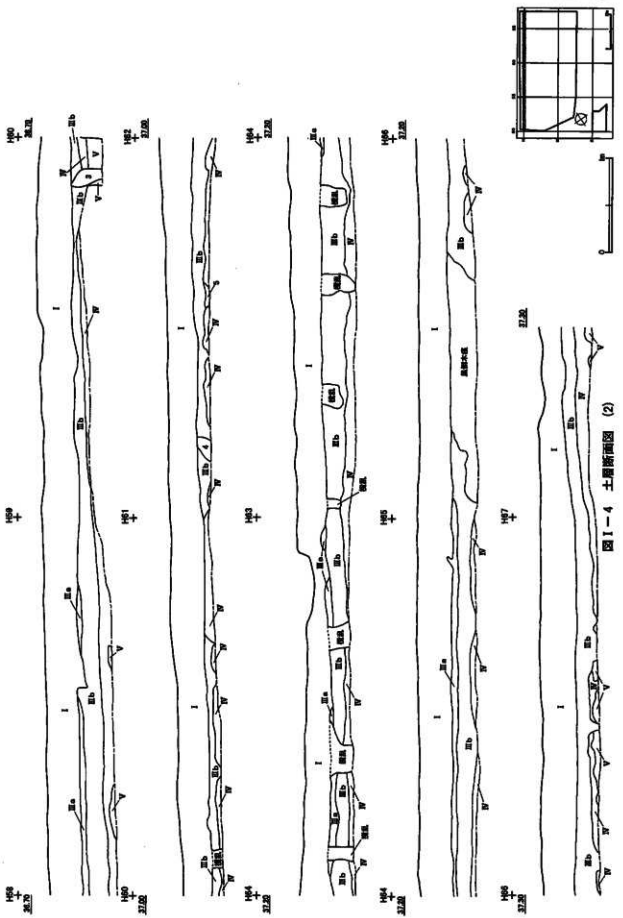
４：暗黄褐色土。

５：暗褐色土。黄褐色土がわずかに混じる。

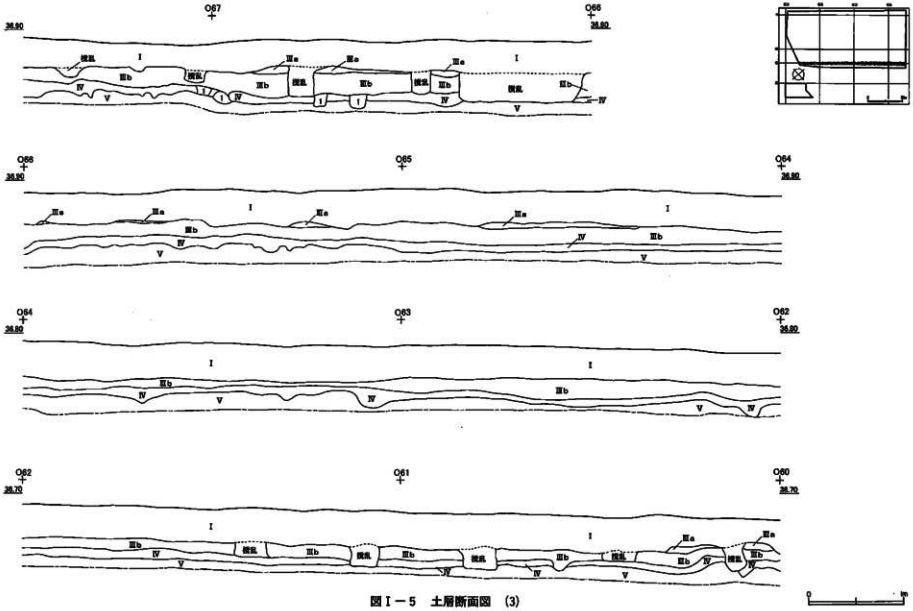
発掘区内での堆積は安定しており、上記の基本層序が良好に確認された。遺物包含層であるⅢａ層、Ⅲｂ層はＨライン付近の北西側、Ｏラインの南東側と北西側で主に認められた。各層の堆積時期は、出土遺物及び八雲町内の他遺跡の層位との比定から、Ⅳ層が縄文時代早期、Ⅲｂ層が縄文時代、Ⅲａ層が縄文時代後・晩期以降から1640年までと考えられる。しかし、野田生５遺跡においてはⅢｂ層やⅣ層から続縄文時代の遺物の出土する例があり、これは多数確認された風倒木痕の影響により遺物が上下に移動したためと考えられる。


H50
35.80
H51
H52
35.80
H52
35.20
H53
H54
35.20
H54
35.40
H55
H56
36.40
H56
36.60
H57
H58
36.80
I
IIb
IIa
IV
V
2
0
1
m

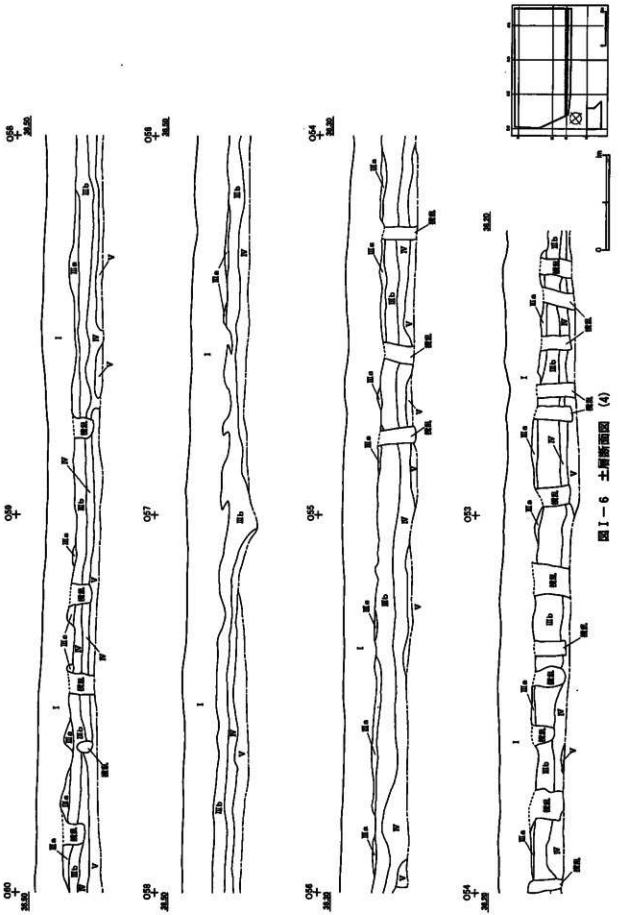
図Ⅰ－3　土層断面図　(1)



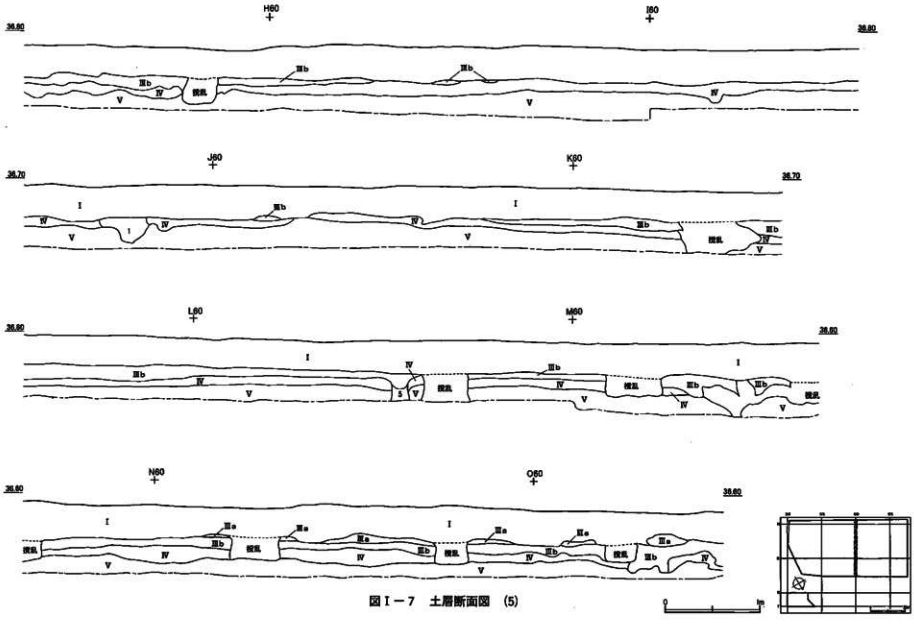
図Ⅰ－4　土層断面図 (2)


O67
O66
34.90
34.80
O66
O65
O64
34.90
34.80
O64
O63
O62
34.80
34.80
O62
O61
O60
34.70
34.70
I
IIa
IIb
IV
V
横孔
0
1
m

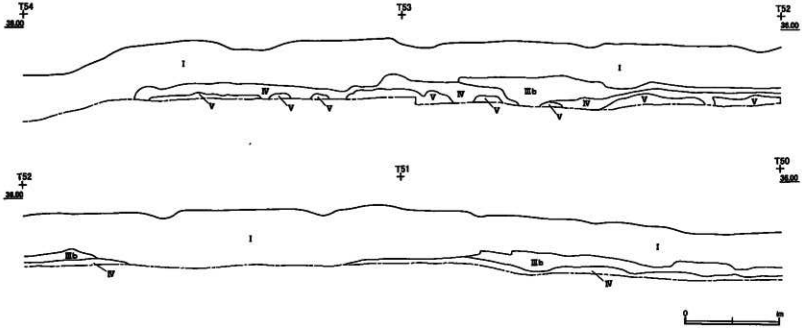
図Ⅰ－5　土層断面図　(3)

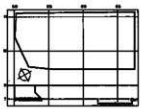


図Ⅰ－6　土層断面図（4）


H60
I60
38.80
38.80
Ⅲb
Ⅲb
Ⅳ
撹乱
Ⅴ
Ⅴ
Ⅳ
J60
K60
38.70
38.70
Ⅰ
Ⅰ
Ⅲb
Ⅳ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅲb
Ⅴ
Ⅴ
撹乱
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
L60
M60
38.60
38.60
Ⅰ
Ⅰ
Ⅳ
Ⅲb
Ⅲb
Ⅳ
Ⅴ
Ⅴ
撹乱
Ⅴ
撹乱
Ⅲb
Ⅳ
Ⅲb
Ⅲb
Ⅴ
撹乱
N60
O60
38.60
38.60
Ⅰ
Ⅰ
Ⅲa
Ⅲa
Ⅲa
Ⅲa
Ⅲa
Ⅲa
撹乱
Ⅲb
撹乱
Ⅲb
撹乱
Ⅲb
撹乱
Ⅲb
Ⅳ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅴ
0
1
2m

図Ⅰ－7　土層断面図　(5)





図Ⅰ－8　土層断面図　(6)

(3) 調査の方法

発掘区は牧草地で（図Ⅰ－9）表土層のしまりも弱く層厚も20～30cm程度であったため、人力による表土除去から開始した。調査に先立ち4m区画の杭の設定を業者に委託したが、発掘調査は基本的にこの4m区画単位で行った。土層断面観察用にベルトをHライン、Oライン、60ラインに残し、全面的に表土を除去した。この段階で、出土した遺物は発掘区単位で取り上げを行った。Ⅲ層検出後、Ⅲ層の残存状況、遺構の位置などを大まかに把握し、排土運搬用の一輪車の通り道を考慮しながら、Ⅲ層の堆積が比較的良好に残るL・M・N60ラインから北西側の発掘区と、60ラインのベルトに沿ったH～N59区を中心に包含層調査を開始した。包含層調査は層位を観察しながら、Ⅲ層からⅣ層まで連続して掘削を行った。Ⅲ・Ⅳ層の出土遺物は大きさ1.5cmを基準に、基準値未満を発掘区一括遺物、基準値以上を点取り遺物（出土地点を計測した遺物）として順次取り上げた。点取り遺物は設定した発掘区の杭を基準に地点を計測し、発掘区ごとに連続した遺物番号を付した。

縄文時代の遺物包含層であるⅣ層までの掘削を終了した後、重機による旧石器確認調査を行った（図Ⅰ－11）。調査面積は発掘区全体の7.9%に相当する176m²であり、基盤礫層、もしくは基盤礫層からの礫の浮き上がりが著しくなる土層まで掘り下げたが旧石器時代の遺物を確認することはできなかった。

なお、調査時にも農道として使用されていたK～O50区の一部とM～O50区の一部、電柱が設置されていたR～S53・54区の一部他は、周囲の調査結果から遺物分布範囲でないと判断されること等から計画を変更し、調査範囲から除外した。その結果、調査面積は当初計画の2,400m²から2,230m²に変更された（図Ⅰ－10）。

(4) 整理の方法

遺物は調査方法により、点取り遺物と発掘区単位で取り上げた一括遺物に大きく区分される。

一次整理のうち、遺物の水洗作業、一次分類、重量計測は基本的に現地で行った。点取り遺物は個々の遺物に対しての計測、一括遺物は発掘区単位での点数集計、重量計測を行い、手書きの台帳を作成した。一括遺物は計測後、石器に関して分類を行い、抜き出し遺物を抽出した。その後、遺物を江別の整理作業所に運び、注記作業、抜き出し遺物の計測、台帳作成、コンピューターへの台帳入力を行い一次整理を終了した。なお、抜き出し遺物は点取り遺物同様発掘区ごとに連続番号を付し、層位が変わっても番号はそのまま連続させた。注記は基本的に全点に対して行い、調査年を西暦の下二桁で、遺跡名はアルファベットを用いた略称（野田生5＝ND5）で先頭に表し、以下発掘区・層位・遺物番号の順に記入した。ただし点取り遺物、一括遺物、一括抜き出し遺物の遺物種類ごとに異なる記入方法を設定しため、以下例をあげて説明する。

点取り遺物（M23区、遺物番号105の場合）

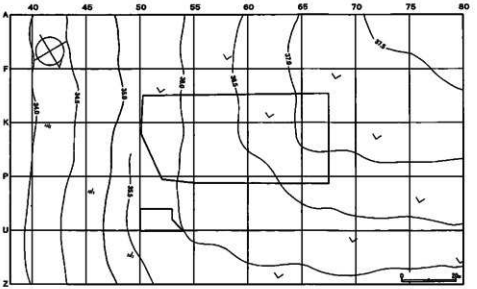
00. / 調査年　ND5. / 遺跡名　M23. / 発掘区名　105 / 遺物番号

一括遺物（M62区、Ⅰ層一括の場合）

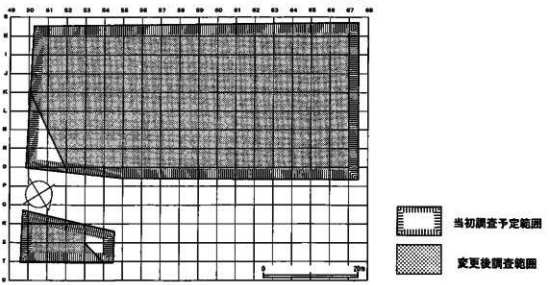
00. / 調査年　ND5. / 遺跡名　M62. / 発掘区名　1 / 層位

一括抜き出し遺物（M43区、Ⅲb層、遺物番号5の場合）

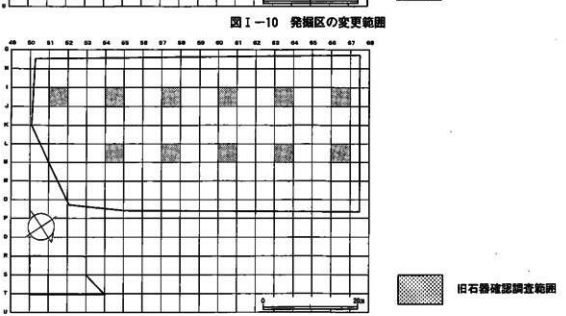
00. / 調査年　ND5. / 遺跡名　M43. / 発掘区名　Ⅲb. / 層位　5 / 遺物番号



図Ⅰ－9　遺跡現況図



図Ⅰ－10　発掘区の変更範囲



図Ⅰ－11　旧石器確認調査範囲

二次整理は土器と石器にわけて説明する。土器は再分類後に接合作業を経て、器形が確認できたものに対して復元を行い、図化した。破片資料に対してはおおよその文様構成や器形のわかるものに対して拓影図及び断面図を作成した。また接合作業後、接合状況を台帳に記録し、1～1000の番号を土器に用意して接合番号を付した。写真撮影は挿図に掲載した資料の全てに対して行った。石器は再分類を行った後に器種別に収納し、必要な計測・属性観察を行った。図化は器種分類した中でも定型的な石器を中心に完形品、器体残存の良好なものを選択して行った。野田生5遺跡の場合、耕作の著しい撹乱により遺物のほとんどがⅠ層出土遺物であったため、それらも積極的に掲載した。図化作業後、石器全点に対し石材分類を行い、可能な限り同一母岩資料の識別に努めながら接合作業を実施した。接合作業後、接合状況を台帳に記録し、また同一母岩視される資料に対しては母岩分類を行い、母岩別台帳を作成した。石器に対しては剥離面接合に1001～2000、折れ面接合に2001以降の接合番号、同一母岩資料には母岩番号を1から用意して付した。写真撮影は挿図に掲載した資料のほか、一部の挿図未掲載の石器に対しても行った。

(5) 遺物の分類

土器

土器はこれまで渡島半島、噴火湾～太平洋沿岸で発掘調査された成果に基づく分類を踏襲することとした。縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。

Ⅰ群　縄文時代早期に属する土器群（今回は出土していない）

a類　貝殻文のあるもの

b類　縄文、撚糸文、結条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施されるもの

Ⅱ群　縄文時代前期に属する土器群（今回は出土していない）

a類　縄文尖底土器群

b類　円筒土器下層式に相当するもの

Ⅲ群　縄文時代中期に属する土器群

a類　円筒土器上層式に相当するもの

b類　榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式に相当するもの

Ⅳ群　縄文時代後期に属する土器群

a類　余市式、入江式、大津式、白坂3式に相当するもの

a-1類　余市式に相当するもの

a-2類　入江式・大津式・白坂3式に相当するもの

b類　船泊上層式、手稲式、鮏澗式に相当するもの

c類　堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの

Ⅴ群　縄文時代晩期に属する土器群

a類　大洞B式、上ノ国式に相当するもの

b類　大洞C_1式、大洞C_2式に相当するもの

c類　大洞A式、大洞A′式、タンネトウL式に相当するもの

Ⅵ群　縄文時代に属する土器群
a類　恵山式以前に相当するもの
b類　恵山式に相当するもの
c類　後北式に相当するもの
d類　弥生系に相当するもの

Ⅶ群　擦文時代に属する土器群

石器

石器は遺跡内で出土したものに対し、その器種名称と定義を述べることとする。なお、石器の計測方法については図Ⅰ－12に示した。

石鏃

剥片を素材とし、押圧剥離により両面が調整され、尖頭形を呈す5㎝未満のもの。形状により三角形無茎、三角形有茎、木葉形有茎に細分類される。

石槍

剥片もしくは礫を素材とし、押圧剥離や平坦剥離によって両面が調整され、尖頭形を呈す5㎝以上のもの。

掻器

剥片を素材とし、60度以上の急角度な剥離が素材端部に連続的に加えられたもの。スクレイパーの範疇に入るが、定形的石器として抽出した。

スクレイパー

剥片を素材とし、剥離が素材の側縁に10枚以上連続して加えられたもの。

両面調整石器

剥片もしくは礫を素材とし、剥離が素材の両面に施されるが尖頭形でないもの。

ピエス・エスキーユ

剥片もしくは礫を素材とし、対向する小剥離が素材の両端部にあるもの。また、いわゆる両極剥離打法により発生する各種の割れの特徴を持つもの。素材、剥離箇所、樋状剥離面の有無により細分類される（細分類の内容はⅣ章に記載）。

Rフレイク（二次加工ある剥片）

剥片を素材とし、散漫な剥離が加えられた不定形のもの。

剥片

石核、石器（トゥール・剥片）から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

石核

剥片もしくは礫を素材とし、石器（トゥール）の素材となりえる大きさ・形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

原石

打製石器の素材を供給する石材の礫のうち、素材剥片の剥離が行われていないか、もしくは不明瞭なもの。石器の原材料とみられるもの。

石斧

剥片もしくは礫を素材とし、打欠き・研磨により整形され、斧状の刃部があるもの。

すり石

礫を素材とし、擦り痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

敲石

礫を素材とし、敲打痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

台石・石皿

礫を素材とし、擦り痕もしくは敲打痕があるものの内、受動的と考えられるもの。

(6) 調査結果の概要

野田生５遺跡は八雲市街の南東約８km、柏木川の河岸段丘上標高約35mに位置し、川からの距離は約170m、川との比高は16m前後である。発掘区は遺跡のほぼ中央、非常になだらかな傾斜地形に立地している。遺跡は畑として利用され、Ⅲ層上部からⅣ層まで攪乱された状態であった。調査面積は当初2,400㎡であったが、計画変更により2,230㎡となった。

検出した遺構は土壙４基、Ｔピット１基、焼土・炭化木片集中８箇所であった。遺構は、Ｈ・Ｉ・Ｊ50～55、Ｌ・Ｍ・N56～57、Ｌ・Ｍ・N62～64の３か所に主にまとまってみられる。土壙は４基とも上部が削平のため失われているが、掘り込みが浅く長径も120cm未満であった。なお、遺物を伴出した遺構はＰ-５、Ｃｂ-３・５がある。焼土・炭化木片ブロックからは土壌を採取しフローテーション作業を行い、炭化木片、炭化種子を採取したが、放射性炭素年代測定法や炭化種子同定等の分析は行っていない。各遺構の時期であるが、Ｐ-５は恵山式土器の破片が出土しているため、当該期に構築された可能性がある。ＴＰ-１は遺物は出土していないが道内での出土事例から縄文時代前期から後期にかけて構築されたと考えられる。他の遺構についての時期は不明である。

出土した遺物は土器（2,026点・11,024.1ｇ）、石器（724点・20,758.7ｇ）、礫（629点・66,923.3ｇ）である。集計の詳細は表Ｉ－１に示した。出土土器の多くはⅥ群、特にⅥ群ｂ類からⅥ群ｃ類に属するもので、一部Ⅳ群ｂ類の土器もみられる。石器は石鏃、石槍、掻器、スクレイパー、両面調整石器、Ｒフレイク、ピエス・エスキーユ、剥片、石核、原石、石斧、すり石、敲石、台石・石皿が出土している。石鏃には平面形が二等辺三角形及び木葉形で有茎のものと、二等辺三角形で無茎のものがあり、それぞれ続縄文時代恵山式期及び後北式期に特徴的な形態のものが含まれる。またピエス・エスキーユは数量的に主体的な石器として認められる。

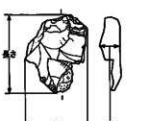
点取り遺物からみた後北式期の遺物の分布状況は、遺構の分布範囲とほぼ符合し、土壙、焼土・炭化木片ブロックとの同時代性が考えられる。また、後北式期を中心とした土器と石器に関してもそれぞれの分布のまとまりが重なりあう出土状況から共伴遺物の可能性がある。

表Ⅰ－1　出土遺物点数・重量一覧

		遺構				点取り遺物			一括遺物					合計
		P-5	Ch-3	Ch-5	計	平面	断面	計	1層	平面	断面	その他	計	
土器	点数	12	9	0	21	362	50	412	1369	156	6	12	1573	2026
	重量(g)	63.1	3.04	0	70.74	2175.8	204.3	2380.1	7724.5	394.5	4.9	69	8193.3	11024.1
石器	点数	0	21	2	23	68	14	82	422	189	7	3	621	724
	重量(g)	0	0.68	0.01	0.69	2401.8	5987.4	8389.2	12248.4	97.2	16.4	8.4	12369.4	20758.7
礫	点数	0	0	0	0	43	7	50	567	10	0	2	579	629
	重量(g)	0	0	0	0	10895.3	2382.2	12477.5	92339.8	1089	0	1007	94435.8	96913.3
合計	点数	12	30	2	44	481	101	582	2358	355	13	17	2773	3379
	重量(g)	63.1	3.72	0.01	70.83	14972.5	8573.3	23372.8	72311.1	1490.7	21.3	1076.4	74899.5	98702.1

表Ⅰ－2　石器器種別点数・重量一覧

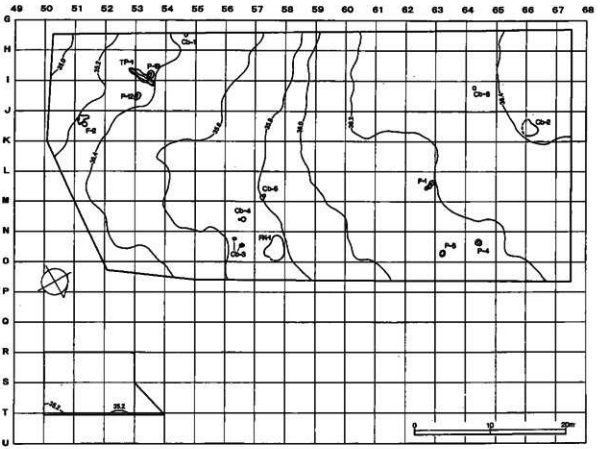
		遺構			点取り遺物			一括遺物					合計
		Ch-3	Ch-5	計	平面	断面	計	1層	平面	断面	その他	計	
石鏃	点数	0	0	0	6	0	6	7	1	1	0	9	15
	重量(g)	0	0	0	7	0	7	7.1	0.3	1.3	0	8.7	15.7
石槍	点数	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	2
	重量(g)	0	0	0	16	0	16	6.3	0	0	0	6.3	22.3
錐器	点数	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	2
	重量(g)	0	0	0	0	0	0	20.2	0	0	0	20.2	20.2
スクレイパー	点数	0	0	0	3	1	4	8	0	1	0	9	13
	重量(g)	0	0	0	36.6	18	54.6	117.2	0	6.9	0	124.1	178.9
両面調整石器	点数	0	0	0	1	0	1	5	0	0	0	5	6
	重量(g)	0	0	0	16	0	16	160.2	0	0	0	160.2	176.2
ポイント	点数	0	0	0	7	1	8	26	0	0	1	27	35
	重量(g)	0	0	0	16.1	0.1	16.2	274.8	0	0	1.4	276	294.2
ピエス・エスキーユ	点数	0	0	0	5	0	5	21	2	0	0	23	28
	重量(g)	0	0	0	16.7	0	16.7	150.2	6.7	0	0	156.9	176.6
剥片	点数	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4	4
	重量(g)	0	0	0	0	0	0	3.2	0	0	0	3.2	3.2
剥片	点数	21	2	23	37	8	45	317	195	8	3	510	579
	重量(g)	0.68	0.01	0.69	104.6	27.3	131.9	2123.5	83.2	6.2	6	2229.9	2361.58
石核	点数	0	0	0	0	1	1	7	0	0	0	7	8
	重量(g)	0	0	0	0	5	5	646	0	0	0	646	652
原石	点数	0	0	0	2	0	2	12	0	0	0	12	14
	重量(g)	0	0	0	772.5	0	772.5	655.8	0	0	0	655.8	1428.3
石斧	点数	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	2
	重量(g)	0	0	0	4	0	4	48.4	0	0	0	48.4	52.4
石錘	点数	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1
	重量(g)	0	0	0	0	0	0	40.8	0	0	0	40.8	40.8
すり石	点数	0	0	0	3	0	3	5	0	0	0	5	8
	重量(g)	0	0	0	1498	0	1498	2603.2	0	0	0	2603.2	4099.2
敲石	点数	0	0	0	0	1	1	3	0	0	0	3	4
	重量(g)	0	0	0	0	548	548	1356.1	0	0	0	1356.1	1904.1
台石・石皿	点数	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	2	3
	重量(g)	0	0	0	0	5290	5290	2404	0	0	0	2404	7694
合計	点数	21	2	23	66	14	80	422	189	7	3	621	724
	重量(g)	0.68	0.01	0.69	2401.8	5987.4	8389.2	12248.4	97.2	16.4	8.4	12369.4	20758.7



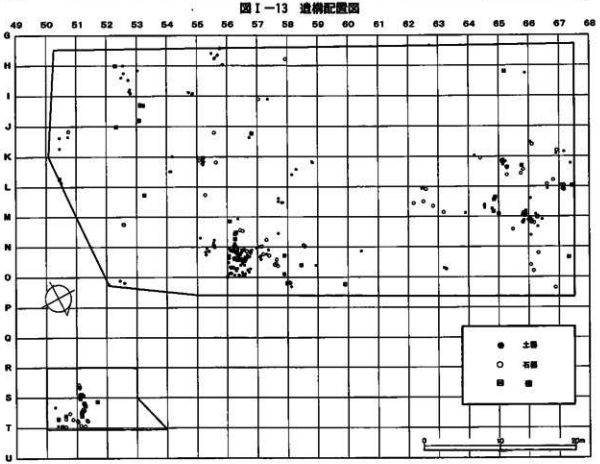
図Ⅰ－12　石器の計測箇所

表Ⅰ－3　石器石材別点数・重量一覧

		遺構			点取り遺物			一括遺物					合計
		Ch-3	Ch-5	計	平面	断面	計	1層	平面	断面	その他	計	
頁岩	点数	20	2	22	29	9	38	211	24	3	3	241	279
	重量(g)	0.06	0.01	0.08	120.5	47.2	167.7	2706.6	73.1	3.4	9.4	2765.3	2933.2
黒曜石	点数	1	0	1	11	3	14	82	157	2	0	161	196
	重量(g)	0.01	0	0.01	34.8	2.2	36.7	81.8	12	0.2	0	94	130.71
安山岩	点数	0	0	0	17	0	17	70	8	0	0	78	95
	重量(g)	0	0	0	809.8	0	809.8	1389.4	12.1	8.9	0	1408.4	2218.2
チャート	点数	0	0	0	2	0	2	1	0	0	0	1	3
	重量(g)	0	0	0	24	0	24	8.7	0	0	0	8.7	32.7
安山岩	点数	0	0	0	3	0	3	1	0	0	0	1	4
	重量(g)	0	0	0	3	0	3	535.8	0	0	0	535.8	538.8
砂岩	点数	0	0	0	3	2	5	14	0	1	0	17	22
	重量(g)	0	0	0	1408	2535	3943	7461.7	0	5.9	0	7467.6	11411.6
緑色凝灰岩	点数	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	1	2
	重量(g)	0	0	0	4	0	4	48.4	0	0	0	48.4	52.4
合計	点数	21	2	23	66	14	80	422	189	6	3	621	724
	重量(g)	0.06	0.01	0.1	2401.8	5987.4	8389.2	12248.4	97.2	16.4	8.4	12369.4	20758.7



図Ⅰ－13　遺構配置図



図Ⅰ－14　遺物分布図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

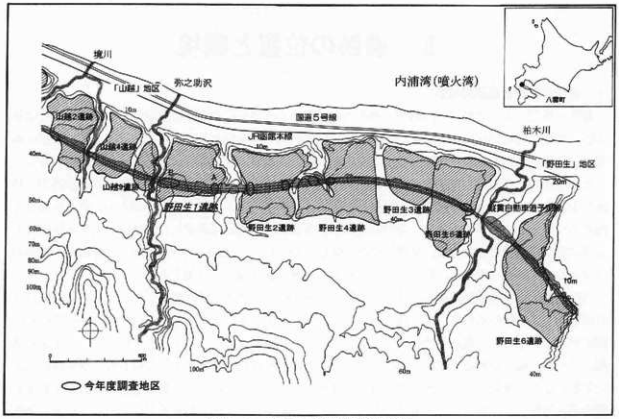
1　遺跡の位置と周辺の地形

遺跡の所在する八雲町は、内浦湾（噴火湾）に面する渡島半島の北東部に位置し、渡島管内では最も広い面積（736.47㎢）を有している。北側はルコツ川を挟み長万部町と、南側は茂無部川を挟み森町と、西側は渡島山地を挟んで、桧山支庁の今金町、熊石町、厚沢部町、乙部町、北桧山町と接している。遺跡は八雲市街の南東約８km、野田生地区に所在し、海成段丘である落部段丘面（標高20～40m）上の非常になだらかな傾斜地に立地している。野田生地区には弥之助沢、柏木川、野田生川など内浦湾に注ぐ大小の河川があり、多数の遺跡がこうした河川流域に発達した河岸段丘上や海岸段丘上にほぼ間断なく所在している。発掘区は海岸線から450mほど、柏木川から170mほど離れた、遺跡のほぼ中央、標高35m付近に位置しており、柏木川の河岸段丘面上に立地する。

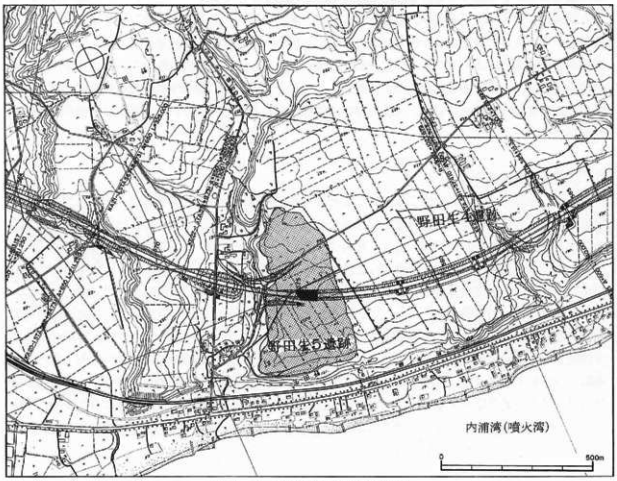
「野田生」の地名は野田追川を挟んで西側の地区を指し、東側は「野田追」と書く。八雲町史によれば「野田生は椴の木の多いところともいわれたが、ノダヘからノダオイになったといわれている。海岸が、ふっくらした鈍い岬で凸凹しているので、その形を『ノタ・オ・イ』といった。『ノタ』は頬、『オ』は幾つかあるさま、『イ』は所の義である。それが『ヌプタイ』といわれた所も含めた広い字名となり、落部寄りと区別して野田生と書かれるようになった。」とある。永田方正著「北海道蝦夷語地名解」によれば、野田追はアイヌ語のヌプ・タイ（野・林）からきたとされる。なお、落部野田追は字名改正で現在は東野と変更されているが、古くからノタオイと記されてきた地域は主にこの東野地区を指す可能性が強い。昭和14年に刊行された「落部村郷土史」ではシャクシャインの乱で戦功のあった新井田権之助に野田追場所として初めて与えられた内容の記述があるが、これは史実の実証がなく確実性の薄いものとされている。寛文10年に記された「津軽一統志」には、ノダオイに場所が設置され、新井田権之助の名前が知行主として記されている。野田生場所は寛政３年に建立した蛭子神社を祭り、施政上は沼尻、由追を含めて領域としたとされている。蛭子神社は現在の恵比須神社にあたる。

2　野田生地区周辺の遺跡

八雲町内の遺跡についてはすでに詳細にまとめられているため（北埋調報142）本報告では割愛し、野田生地区周辺についてのみ記述する。東野を含めた野田生地区には北西から野田生１遺跡、野田生２遺跡、野田生４遺跡、野田生３遺跡、野田生５遺跡、台の上遺跡、新牧場遺跡、小金沢遺跡が所在する。野田生１遺跡～野田生３遺跡は弥之助沢と柏木川に挟まれた海岸段丘上に、新牧場遺跡は野田追川を挟み東側の海岸段丘上に、台の上遺跡、小金沢遺跡は野田追川の河岸段丘上に立地している。時期は縄文時代早期～擦文時代にわたり、縄文時代中期の遺物出土が多くみられる。㈶北海道埋蔵文化財センターによる平成12年度の調査の結果からは次のような内容が確認されている。野田生１遺跡では縄文時代後期中葉～後葉の大規模な集落跡が確認され、竪穴住居跡内から多数の完形土器と共に赤彩土器が出土している。野田生４遺跡では縄文時代中期の竪穴住居と土壙が確認され、土壙内からは円筒土器上層式の完形土器が出土している。野田生２遺跡では縄文時代中期と考えられる竪穴住居と土壙が確認されている。また、野田生５遺跡で主体的に出土する続縄文時代の遺物は、野田生地区では台の上遺跡で後北式と弥生系の土器が混在して出土している。

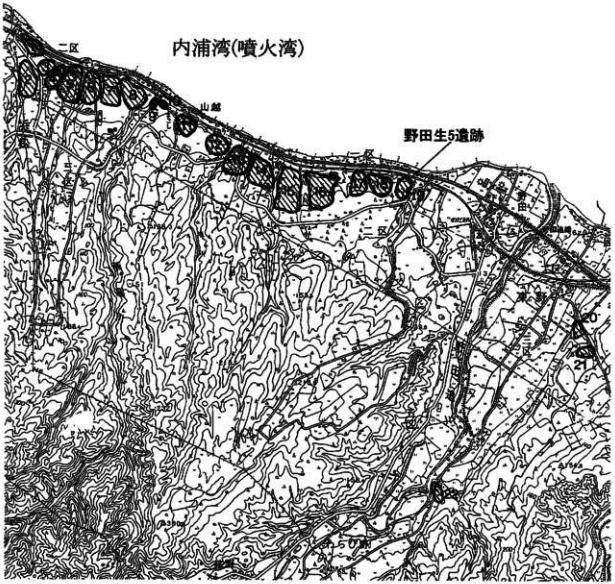


図Ⅱ－1　野田生５遺跡と周辺の遺跡



図Ⅱ－2　遺跡の範囲と周辺の地形

図版番号	遺跡名	全国遺跡番号	主な時期	立地	標高(m)
1	オクツナイ遺跡	B-16-1	縄文時代	海岸段丘	8～20
2	浜松3遺跡	B-16-27	縄文時代中期	海岸段丘	22～32
3	浜松4遺跡	B-16-43	縄文時代晩期、弥生時代	海岸段丘	20～24
4	コタン温泉遺跡	B-16-9	早期～晩期、続縄文時代	海岸段丘	21～34
5	浜松1遺跡	B-16-4	縄文時代中期	海岸段丘	22～28
6	浜松2遺跡	B-16-25	縄文時代草屋～晩期	海岸段丘	20～30
7	浜松5遺跡	B-16-59	縄文時代草屋・中期・晩期、続縄文時代	海岸段丘	20～31
8	先山牧場遺跡	B-16-21	縄文時代前期・中期	海岸段丘	20～30
9	山越6遺跡	B-16-56	縄文時代前期～晩期	海岸段丘	14
10	山越8遺跡	B-16-57	縄文時代中期、続縄文時代	海岸段丘	14
11	山越1遺跡	B-16-11	縄文時代中期	海岸段丘	30
12	山越3遺跡	B-16-43	縄文時代前期～晩期	海岸段丘	32～34
13	山越2遺跡	B-16-44	縄文時代前期～続縄文時代	海岸段丘	20～30
14	山越4遺跡	B-16-46	縄文時代中期	海岸段丘	30～39
15	野田生1遺跡	B-16-47	縄文時代中期～後期	海岸段丘	33～40
16	野田生2遺跡	B-16-48	縄文時代草屋・中期	海岸段丘	34～38
17	野田生4遺跡	B-16-50	縄文時代中期	海岸段丘	28～38
18	野田生3遺跡	B-16-49	縄文時代中期	海岸段丘	25～37
19	野田生5遺跡	B-16-51	縄文時代中期・後期、続縄文時代、擦文時代	河岸段丘	30～35
20	合の上遺跡	B-16-13	縄文中期～晩期・続縄文時代	河岸段丘	15～20
21	御牧場遺跡	B-16-30	縄文時代後期	海岸段丘	30
22	小倉沢遺跡	B-16-16	縄文中期	河岸段丘	40



図Ⅱ－3　野田生地区周辺の遺跡（この図は国土地理院発行５万分の１地形図「八雲」を複製したものである）

Ⅲ　遺構と出土遺物

1　概要

遺構はTピット1基、土壙4基、焼土・炭化木片ブロック8か所、フレイク集中1か所が確認された。土壙はH・I52～53区の範囲にP-12・19が、N63～64区の範囲にP-4・5が、2基ずつまとまって検出された。P-5の覆土からは恵山式土器が出土しており、当該期に構築されたと考えられる。焼土・炭化木片ブロックはL・M・N56～57区の範囲に3つがまとまって確認され、フレイク集中が近接していた。Tピットは単独で確認され、遺構長軸が柏木川とほぼ直交する方向に構築されていた。

2　Tピット

TP－1（図Ⅲ-1、表1、図版2-3・4、3-1）

位　置　H52・53区、I53区

規　模　360／397×（94）／23×110

形　状　平面は長楕円形で、長軸両端の壁がオーバーハングしている。

確　認　H52区をⅢb層下部まで掘り下げた時点で、遺構南側のプランが検出された。H・I53ラインに沿ってトレンチ調査を行いⅢb層から構築された掘り込みを確認し、さらにH・I53区の遺構確認面までの掘削・精査を行った。これによりP-19がTピット1と重複して検出されたため、Tピット1からP-19にまたがるトレンチ調査を行い、Tピット1がP-19に破壊された堆積状況を示すことが確認できた。

覆　土　10層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：黒褐色土。しまり中、粘性中～強。自然堆積層と捉えられる。
2：黒褐色土。1に比べしまりがやや弱く、細粒である。
3：暗黄褐色土。しまり中。ブロック状にⅢ～Ⅴ層が混じりあった土。
4：褐色土。しまり中、粘性中～強。1～3が混じりあった土。
5：暗褐色土。しまり中、粘性強。焼土ブロックとみられる赤褐色土が含有される。
6：暗黄褐色土。3に類似するが、色調が暗くしまりが弱い。ロームブロックを含有する。
7：暗黄褐色土。6に類似するがより多くロームブロックを含有し、しまりが強い。
8：黄褐色土。しまり弱、粘性中～弱。ロームを主体に若干の褐色土が混ざる。
9：明黄褐色土。しまりの弱いローム。
10：暗黄褐色土。しまり弱、粘性中。粗粒である。

1、2は自然堆積を主体としたもの、3～7は流入土に壁のロームが崩落し混ざりあったもの、8～10は壁の崩落土を主体とするものと考えられ、自然営力により覆土が堆積した状態と捉えられる。また、5にみられた赤褐色土のブロックは遺構周辺に焼土が確認されないことから、Ko-gを誤認した可能性がある。

時　期　遺物の出土がないため明確ではないが、出土例と確認層位から縄文時代前期から後期の間に構築されたと考えられる。

3　土壙

P-19（図Ⅲ-1、表1、図版3-2・3）

位　　置　H53区

規　　模　110／70×75／35×27

平 面 形　楕円形

確　　認　Ⅲb層下部精査中に検出。トレンチ調査によりTピット1の北西側の壁を破壊して構築されたことが確認された。

覆　　土　6層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：暗褐色土。しまり、粘性は中～強。細粒である。

2：黒褐色土。しまり強、粘性中。粒子は1に比べ緻密である。

3：褐色土。しまり中、粘性弱。Ⅲ～Ⅴ層が細かく混ざり合う土。

4：暗黄褐色土。しまり中～弱、粘性中～強。斑状に3とロームが混じる。

5：黄褐色土。4に類似するがロームをより強く含有する。

6：暗黄褐色土。しまり弱、粘性は中～強。ローム粒と黒色土が斑状に混じる。

遺　　物　出土していない。

時　　期　不明だが周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉か、続縄文時代中葉の可能性がある。

P-4（図Ⅲ-1、表1、図版4-3）

位　　置　N64区

規　　模　78／43×65／43×18

平 面 形　不整円形

確　　認　Ⅳ層上面精査中に確認。

覆　　土　4層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：褐色土。しまり中～強、粘性中。若干ローム粒が混じる。

2：暗黄褐色土。しまり強、粘性中。Ⅲ～Ⅴ層が細かく混ざりあった状態か。

3：暗黄褐色土。2に類似する。ロームが強く混じり色調が明るい。

4：黄褐色土。しまりやや弱。ロームを主体に黒色土が混じる。

遺　　物　出土していない。

時　　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性がある。

P-5（図Ⅲ-1、表1、図版4-1・2）

位　　置　N63区

規　　模　69／62×(67)／(50)　×20

平 面 形　不整円形

確　　認　Ⅲb層上部精査中に確認。

覆　　土　4層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：暗褐色土。しまり、粘性共に強。

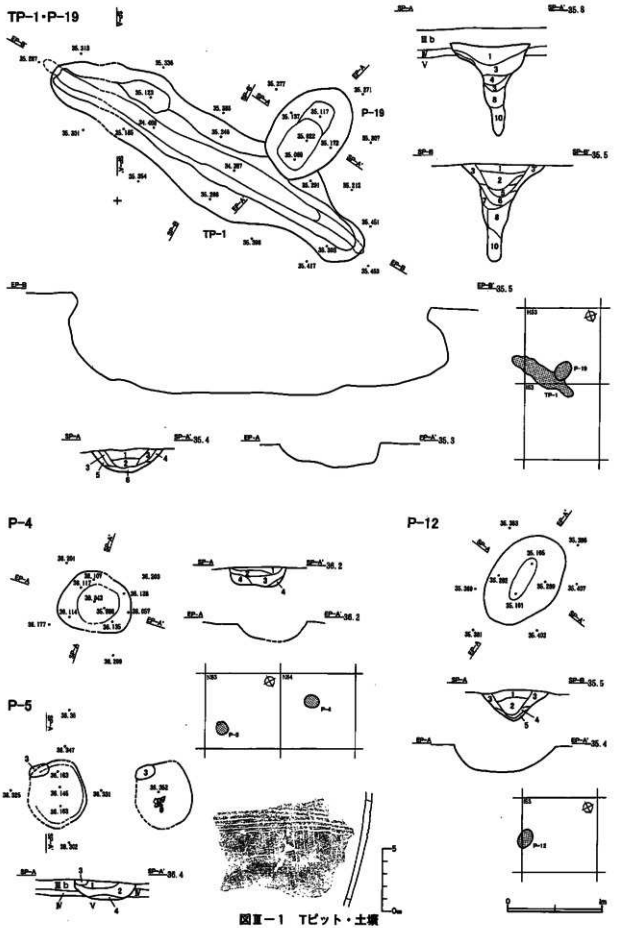
2：暗褐色土。しまり強、粘性中～強。黒色土と暗黄褐色土が斑状にみられる。

3：明褐色シルト粘土。しまり、粘性強。

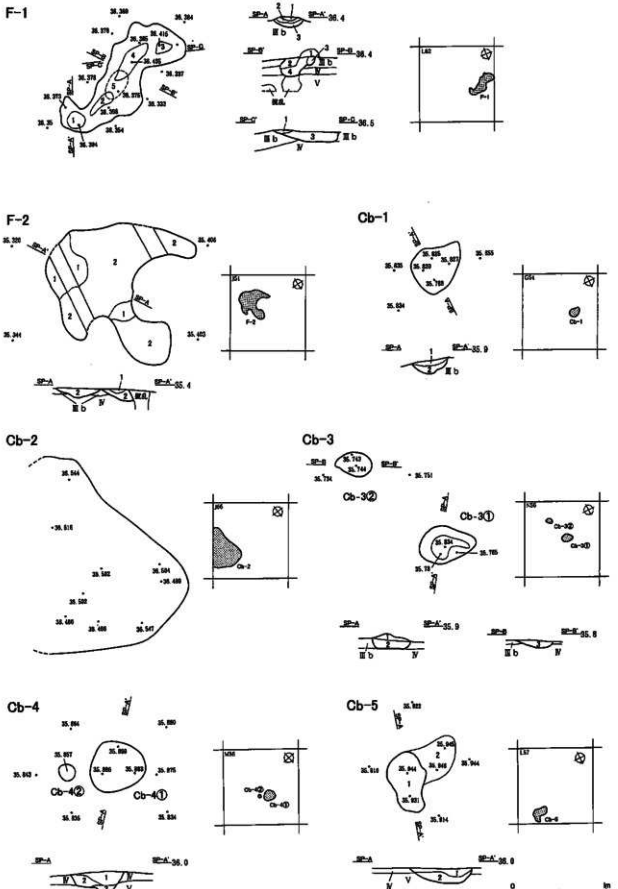
4：黄褐色土。Ⅴ層に比べしまり弱、粘性強。斑状に褐色土が混ざる。

特　　徴　確認面で長径22cmの明褐色シルト粘土塊と土器片を検出。

遺　　物　土器12点が出土。



図Ⅲ－1　Tピット・土壙



図Ⅲ－2　焼土・炭化木片ブロック

時　期　出土した土器片が恵山式であることから縄文時代中葉の遺構と考えられる。

P-12（図Ⅲ-1、表1、図版3-4・5・6）

位　置　I 52・53区

規　模　105／52×74／16×32

平面形　楕円形

確　認　Ⅲb層下部掘削、精査中に確認。

覆　土　5層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：暗褐色土。しまり、粘性中～強。Ⅲb層に類似。

2：黒褐色土。1に比べしまり弱、粘性強。Ⅲa層に類似するがやや粗粒である。

3：暗黄褐色土。しまり粘性は1に類似。Ⅲb～Ⅴ層が細かく混じりあった状態。

4：暗黄褐色土。しまり粘性は2に類似。3に類似するが黒色土が強い。

5：黄褐色土。しまり中～弱、粘性中。ロームが強く混じる。

特　徴　壙底が細長く、形態がすり鉢状を呈している。

遺　物　出土していない。

時　期　不明だが周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉か、縄文時代中葉の可能性がある。

4　焼土・炭化木片ブロック

F-1（図Ⅲ-2、表1、図版4-4・5）

位　置　L62区

規　模　160×60

確　認　Ⅲb層上部精査中に確認。

堆　積　4層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：赤褐色土。焼土ブロックである。著しく被熱したとみられ、硬化している。

2：暗褐色土。しまり強、粘性中。焼土粒と粒径3㎝未満の炭化木片を多量に含有する。

3：暗茶褐色土。しまり強、粘性中。粒径0.5㎝程の炭化木片を少量含有する。

4：暗茶褐色土。しまり強、粘性弱。

遺　物　出土していない。

炭化物等　採取した土壌重量37,200gの内33.8％に対し選別を行い、64.5ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。

特　徴　焼土ブロックが大まかに3か所確認され、焼土の下部には燃焼材とみられる炭化木片が多量に検出された。

時　期　不明である。

F-2（図Ⅲ-2、表1）

位　置　J51区

規　模　170×163

確　認　Ⅲb層精査時に確認。

堆　積　2層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：赤褐色土。しまり強、粘性弱。焼土ブロックを多量に含有する。

2：暗褐色土。しまり中～強、粘性弱。炭化木片を多量に含有する。

遺　物　出土していない。

炭化物等　採取した土壌3,350ｇの全てを選別し、26.48ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。
時　　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性がある。
Ｃｂ－１（図Ⅲ－２、表１）
位　　置　Ｇ54区
規　　模　60×47
確　　認　Ⅲｂ層上部精査時に確認。
堆　　積　２層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。
１：黒色土。しまり強、粘性中。シルト質粘土で細粒。炭化木片が散在する。
２：茶褐色土。しまり強、粘性中。やや粗粒。炭化物が散在する。
遺　　物　出土していない。
炭化物等　採取した土壌6,100ｇの内の42.6％に対し選別を行い、85.57ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。
時　　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性がある。
Ｃｂ－２（図Ⅲ－２、表１）
位　　置　Ｊ66区
規　　模　190×(150)
確　　認　Ⅲｂ層上部精査時に確認。
堆　　積　未分層である。
遺　　物　出土していない。
炭化物等　採取した土壌3,000gの全てを選別し、22.41ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。
時　　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性がある。
Ｃｂ－３（図Ⅲ－２、表１）
位　　置　Ｎ56区
規　　模　60×40・40×23
確　　認　Ⅲｂ層掘削時に確認。二か所の小規模なまとまりを検出した。
堆　　積　３層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。
１：暗褐色土。しまり中、粘性弱。炭化木片を多量に含有する。
２：暗黄褐色土。しまり中、粘性中～強。
３：暗黄褐色土。しまり中～弱、粘性中。ロームと暗褐色土が細かく混じりあう土に、粒径１cm程の炭化木片を含有する。
遺　　物　剥片21点、土器片９点が出土したが時期は不明である。
炭化物等　採取した土壌12,300g全てを選別し12.5ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。
時　　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性がある。
Ｃｂ－４（図Ⅲ－２、表１）
位　　置　Ｍ56区
規　　模　60×54・19×17
確　　認　Ⅳ層上面精査時に確認。二か所の小規模なまとまりを検出した。
堆　　積　３層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。
１：暗褐色土。しまり、粘性強。炭化木片が散在し、上部に多い。
２：暗黄褐色土。Ⅳ層と黒色土が混じる。

3：黄褐色土。しまり中、粘性強。ロームブロックを多く含有する。

遺　物　出土していない。

炭化物等　採取した土壌7,250g全てを選別し、9.81ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。

時　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から縄文時代後期前葉か続縄文時代の可能性がある。

Ｃｂ-５（図Ⅲ-２、表１）

位　置　Ｌ57区

規　模　94×58

確　認　Ⅳ層上面精査時に確認。

堆　積　２層に分層した。各層の内容は以下のとおりである。

1：暗褐色土。しまり中～弱、粘性中～強。炭化木片、焼土粒を含有する。

2：暗黄褐色土。しまり中～弱、粘性中～強。ロームブロックが多量に含まれる。

遺　物　剥片が２点出土している。

炭化物等　採取した土壌8,500gの内の41.2％に対し選別を行い、17.99ｇの炭化木片と、炭化種子を抽出した。

時　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性が考えられる。

Ｃｂ-６（図Ⅲ-３、表１）

位　置　Ｉ64区

規　模　55×40

確　認　Ⅲａ層精査時に確認。

堆　積　層の内容は以下のとおりである。

1：黒色土。炭化木片をやや散漫に含有する。

遺　物　出土していない。

時　期　不明である。

5　フレイク集中

ＦＫ-１（図Ⅲ-３、表１）

位　置　Ｎ57区

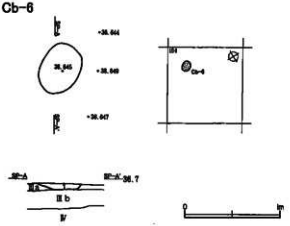
規　模　(300)×260

確　認　Ⅲｂ層精査時に確認。

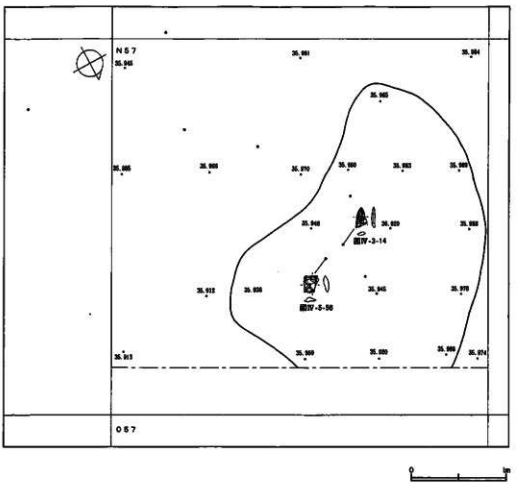
遺　物　剥片は黒曜石が136点（15.4ｇ）、頁岩が１点（0.1ｇ）出土し、黒曜石剥片はⅢ、Ⅳ層から出土したうち、点数で78.2％、重量で39.3％を占める。トゥールは黒曜石製の石鏃、Ｒフレイク、頁岩製のピエス・エスキーユ、スクレイパーなどが出土している。

時　期　不明だが、遺構周辺の出土遺物から続縄文時代中葉の可能性が考えられる。

Cb-6



FK-1



図Ⅲ－3　炭化木片ブロック・フレイク集中

Ⅳ　包含層出土の遺物

1　概要

出土遺物は土器（2,005点・10,953.4ｇ）、石器（701点・20,758.6ｇ）、礫（629点・66,923.3ｇ）がある。耕作による撹乱の影響を受け、ほとんどがⅠ層からの出土である（表Ⅰ－１）。土器は縄文時代のⅥ群が主体的に出土し、そのほとんどがⅥ群ｃ類に属するが、一部Ⅵ群ｂ類、Ⅵ群ｄ類も認められる。また、縄文時代後期のⅣ群、擦文時代のⅦ群も少数であるが出土している。石器は石鏃、石槍、掻器、スクレイパー、両面調整石器、Ｒフレイク、ピエス・エスキーユ、剥片、石核、原石、石斧、すり石、敲石、台石・石皿が出土している。各器種の出土点数・重量はⅠ章の表Ⅰ－２に示した。定形的な石器は少なく、スクレイパー、両面調整石器、Ｒフレイク、ピエス・エスキーユなどの不定形な石器が主体である。数量的には石鏃、ピエス・エスキーユが多く出土している。石鏃は平面形が二等辺三角形で有茎と無茎のものがあり、前者は縄文時代恵山式期、後者は後北式期に特徴的な形態である。ピエス・エスキーユは頁岩と玉髄を主な石材としており、遺跡内で素材を生産供給し、使用を経て遺棄された可能性がある。

（坂本尚史）

2　土器

本遺跡からは2,005点の土器が出土している。主体となるのはⅥ群ｃ類で90.8％を占め、Ⅵ群ｂ類が7.2％で、それに次いでいる。

(1)　Ⅰ層出土の土器（図Ⅳ－１－１～52、表２・３、図版８－４、９－５、10～12）

発掘区の南西部をのぞくほぼ全域から1,399点の土器が出土している。

Ⅲ群

胴部破片が１点出土したが、摩滅の激しい小片のため、掲載していない。

Ⅳ群ｂ類（１）

１は手稲式に相当するもので、大型の浅鉢形土器の底部付近であろう。器壁は凹凸がある。内外面に調整痕が残り、内面では主に横方向に施されている。

Ⅳ群～Ⅴ群（２・３）

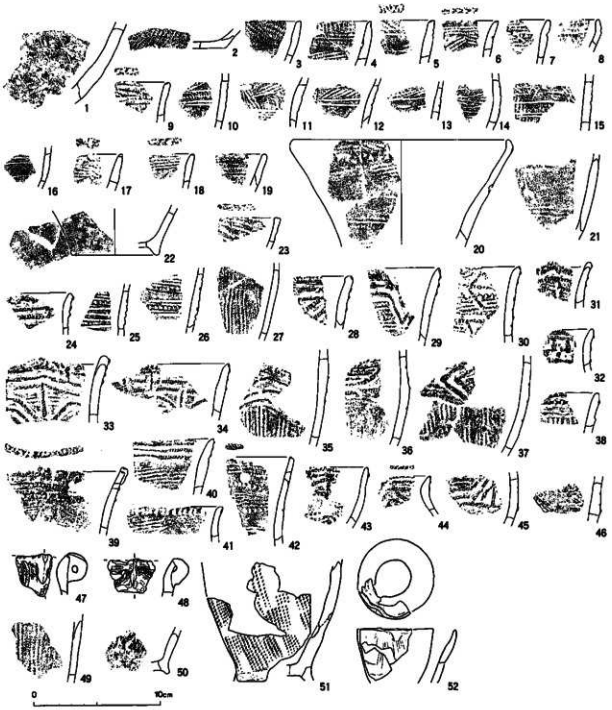
２は胴部の下位に縦位のＲＬ縄文が施された薄手の土器片である。３はＲＬ斜行縄文が施されたもので、口縁部は肥厚し、断面は角張っている。どちらも胎土には海綿骨針が含まれている。これらは縄文後期から晩期のものと考えられる。

Ⅵ群ｂ類（４～22）

南川Ⅳ群に相当するもの65点が南西部を除く発掘区のほぼ全域から出土している。

４～13は沈線で縁取りされた帯状の縄文によって文様が描かれている。６と７、11と12はそれぞれ同一個体である。４は口縁部が内湾気味に立ち上がり、切り出し状の断面をもつもので、口唇直下には縦長の刻み目が加えられている。外面は縄文を施した後に軽くみがかれている。５～７、９は口唇に刻み目が加えられたものである。５の刻み目は口縁にほぼ直交して細長い。６・７・９の刻み目は半截竹管状工具によるものと考えられる。６・７は逆三角形状の無文部に同じ工具による刺突が施されており、７は沈線の交点にも刺突が加えられている。13・14は無文部に短刻線が施されている。

15・16は横走や山形等の沈線文が施されている。16の沈線は浅く、細い。



図Ⅳ－1　包含層出土の土器　(1)

17～21は横走あるいは斜行する帯状縄文が施されたものである。17・18は口唇に刻み目が施されている。17は棒状工具、18は半截竹管状工具を用いたものである。20は直線的に立ち上がり、口縁部が短く内傾する深鉢形の土器と考えられる。屈曲部には半截竹管状工具による刺突列が施されている。内面はよくみがかれている。22は揚げ底の底部で、無文である。

4～8、15～17、19～22は胎土に海綿骨針が含まれている。

Ⅵ群ｃ類（24～51）

後北Ｂ式に相当するもの1,323点が発掘区のほぼ全域に分布している。

24～40は刻み目のある隆起線の施されたものである。24～27は同一個体である。24の隆起線は棒状の工具で隆起線の上下を横方向にみがくようにして整形されている。25・26は横走する縄文を施した後に、半截竹管状工具による半月形の列点文や沈線が加えられている。25には多重沈線がめぐる。薄手の土器で、内面はよくみがかれている。28の隆起線はやや太い。29は隆起線の一部が垂れ下がり、Ｖ字状になっている。30・37の隆起線は菱形状の文様を構成するものであろう。30は隆起線が施された後に、地の横走縄文を縁取るように半月形の列点文が加えられている。31は山形突起の下に円形の隆起線がある。33～36は弧状の隆起線が施されたものである。38は隆起線の下位に沈線がめぐる。39は口縁に突起が加えられている。口縁部の断面は角張り、口唇には半月形の刻み目がある。40の隆起線は細く、刻み目は部分的に加えられている。41は口唇直下に押引状の列点文が施されている。42は横走縄文間の無文部に半月形の列点文が施されたものである。39・42は口縁部に補修孔がある。43は浅鉢形の土器と考えられ、無文地に刻み目のある隆起線が施されたものである。

44～48は壷形土器で、45・46は同一個体である。44の口縁部はほぼ直立し、断面は尖る。44・47の口唇には刻み目がある。45・46は無文地に半截竹管状工具による爪形の列点文が施されている。内面には凹凸があり、横方向の調整痕が残る。47・48は吊り耳をもつものである。44は内外面、45～47は外面に赤色顔料が塗彩されている。

49は帯状縄文にそって赤色顔料の付着した痕跡がみられる。50は隆起線が底部付近まで垂下したものである。51は高台部や底面が欠損している。粘土帯の接合方法は内面下がりで、ミガキの後に縦走する縄文が施されている。内面は一部に横ないし右下がりのヘラナデの痕がある。

27・29・30・35・39・40・42・43・45・46・49・51の胎土には海綿骨針が含まれている。

Ⅵ群ｄ類（23）

L.56区から弥生系の土器１点が出土している。不均等な撚り合わせの縄による縄文が施された薄手の口縁部片である。口唇の厚みは一定ではなく、一部に縄の圧痕がみられる。内面には横方向の調整痕がある。

Ⅶ群（52）

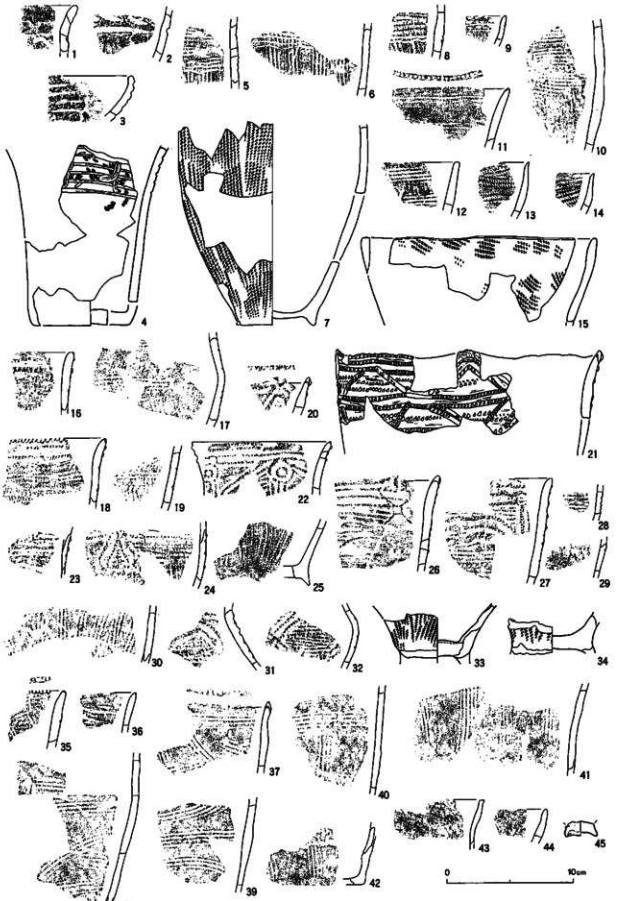
発掘区の北東部から十勝茂寄式に相当すると考えられるミニチュアの片口形土器が出土している。

52の口縁部は内湾気味に立ち上がり、器面は内外面とも凹凸がある。外面はみがかれ、縦方向の調整痕が施されている。胎土には海綿骨針が含まれている。

(2)　Ⅲ層・Ⅳ層出土の土器（図Ⅳ－２－１～45、表２・３、図版８－２・３、９－１～４、13～16）

Ⅲ層から508点、Ⅳ層から86点の土器が出土している。Ⅳ層から出土と記録された土器は、Ⅳ群ｂ類１点を除いてⅥ群ｂ類・ｃ類の土器である。分類ごとの分布状況は図Ⅳ－８に示した。発掘区の中央部には土器の出土していない範囲がある。

なお、Ⅲ層から出土した土器と同一個体の破片がⅠ層からも出土している場合、Ⅰ層のものも図Ⅳ－２に合わせて掲載している。



図Ⅳ－2　包含層出土の土器　(2)

Ⅳ群a類（1・2）

大津式に相当するものが発掘区の南東部から出土している。

1・2は同一個体で、無文地に乙字状や横走する沈線が施されたものである。口縁部の断面は角張っている。口縁部の外面は横方向、胴部の内面は縦方向に調整されているが、器壁は凹凸がある。

胎土には径数mmの角礫、砂粒、海綿骨針が含まれている。

Ⅳ群b類（3・4）

手稲式に相当するものが発掘区の北西部から出土している。

3は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、縄文地に口縁と平行する沈線が施され、括弧状の沈線が加えられている。口唇直下には幅の狭い無文帯がある。内面はみがかれている。

4は胴部が筒状となり、上半部から直線的に立ち上がる器形で、口縁部は欠損している。胴部には縄文を地として平行沈線が施された後に括弧状の沈線が加えられている。文様帯の下位と内面の調整はミガキである。胎土は径2mm程度の円礫が多量に含まれ、海綿骨針も少量認められる。

Ⅵ群b類（5～15）

南川Ⅳ群に相当するもの80点が発掘区の西部と北東部の2箇所から出土している。

5～7は同一個体で、体部に張りのある甕形土器である。体部上半に施された横走縄文の下縁が平行沈線によって区画され、その直下には小波状文がめぐっている。5には補修孔がある。体部下半は縦走する縄文が施されている。底部は揚げ底で、底面の中央部はやや厚みがある。器表面は縄文の施文後にみがかれている。内面の調整もミガキである。胎土には海綿骨針が含まれている。8は横走縄文の下縁に平行沈線と連弧状の沈線が施されたものである。9は口唇直下の無文部に2条の平行沈線がめぐり、その間に短刻線が施されたものである。口唇には楕円形の刻み目がみられる。

10～15は縄文のみのものである。10は体部の上半に横走する縄文、下半に縦走する縄文が施され、下半は縄文の施文後にみがかれている。胎土は砂粒が多い。内面は横方向にみがかれているが、一部ざらつきがある。11・12は口縁に横走する帯状縄文の施されたものである。11の口縁はナデ調整によって尖り、内面側には竹管状の工具による刺突列が加えられている。12は縦走する縄文が施された後に磨り消しと横走する縄文が施されている。外面には炭化物が付着する。13・14は同一個体で、体部はふくらみ、口縁部は短く外反している。9～14には海綿骨針が含まれている。

15は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢形土器で、5～7の北側に隣接して出土した(図Ⅳ－9)。ごく緩やかな波状口縁になるようである。斜行ないし横走するＲＬ縄文が施されている。器面は風化による摩滅が激しい。胎土には海綿骨針や砂粒が含まれている。

Ⅵ群c類（16～45）

後北Ｂ式に相当するもの479点と後北C_2・Ｄ式に相当するもの7点が出土している。後北Ｂ式は発掘区の西側と東側に集中域がある。後北C_2・Ｄ式は発掘区の南東部と北東部から出土している。

後北Ｂ式に相当するもの（16～34）

16と17、18と19、23～25、28と29、31と32はそれぞれ同一個体である。

16・17、18・19は口唇直下に2条の隆起線がめぐり、口縁部から胴部上半にかけては横走縄文、下半には縦走する縄文の施されたものである。横走縄文を縁取るように、半截竹管状工具による列点文が加えられている。口唇には刻み目がある。16・17は胎土に砂粒が多く、風化により摩滅が激しい。M66区を中心に細かく割れた状態で出土した（図Ⅳ－9）。18・19の外面はみがかれた後に施文が行われており、内面もよくみがかれている。

21は横走するＲＬ縄文を施した後、口縁にほぼ平行する2本一組の隆起線と斜位の隆起線を交互に

巡らせている。前者の上下は棒状の工具でなでつけて整形されている。斜位の隆起線には２本一組のものと１本からなるものがあり、小突起の下位には前者、突起間には後者が施されている。それらによって構成された菱形状の文様はゆがみが大きく、割り付けも不均等である。隆起線の間には三角形状の列点文が密に加えられている。内面の調整は口唇直下が横方向になでられ、以下はミガキである。

22・26・27は口縁部に同心円や方形の隆起線を配し、それらを直線的な隆起線でつないだものである。22の隆起線は棒状の工具で上下に太い沈線をひくようにして整形されている。口縁部には補修孔が穿たれている。26・27には下向きの弧線も施されている。26の隆起線は細く、刻み目も細かい。24は胴部上半に山形の隆起線が施されたものである。23～25の内面はよくみがかれている。

18・19・24・28～30は胎土に海綿骨針が含まれている。30の内面には炭化物が付着している。

31・32は壺形土器で、凸レンズ状の隆起線が施され、隆起線で区画された内部には横走縄文の地に半月形の列点文が加えられている。内面のミガキは丁寧である。

33・34は高台部の欠損した底部の破片である。33は底板や立ち上がりの部分を接合する際に粘土を足した部分が一部剥落している。胎土には砂粒が多く含まれている。

後北C_2・Ｄ式に相当するもの（35～45）

35～37は口縁部の断面形が尖り、口唇には刻み目が加えられている。36の胎土には海綿骨針が含まれている。内面には横方向の調整痕がみられる。37～42は同一個体で、Ｈ54区とその周辺に分布し、破片の一部はⅠ層からも出土した。大型の鉢形土器で、口縁はゆるやかな波状になると思われ、波頂部は肥厚している。口縁部の断面形は尖り、口唇には刻み目が加えられている。外面は軽く磨かれてから施文が行われている。胴部下半に縦走する帯状縄文が施された後、口縁部から胴部にかけて横走や弧状の帯状縄文が施され、主文様をなしている。底部は平底である。38・39は内面の一部に炭化物が付着している。胎土には径１㎜程度の小礫が多く、海綿骨針もわずかに含まれている。

43・44は無文の土器である。43の器壁は薄く、口縁部の断面は角張っている。外面には横位と斜位、内面には横位の調整痕がみられる。44の口縁は小波状になっている。45はミニチュアの底部片で、揚げ底になっている。図Ⅳ－１－51と同じ発掘区から出土しており、Ⅶ群土器の可能性もある。

（中田裕香）

3　石器

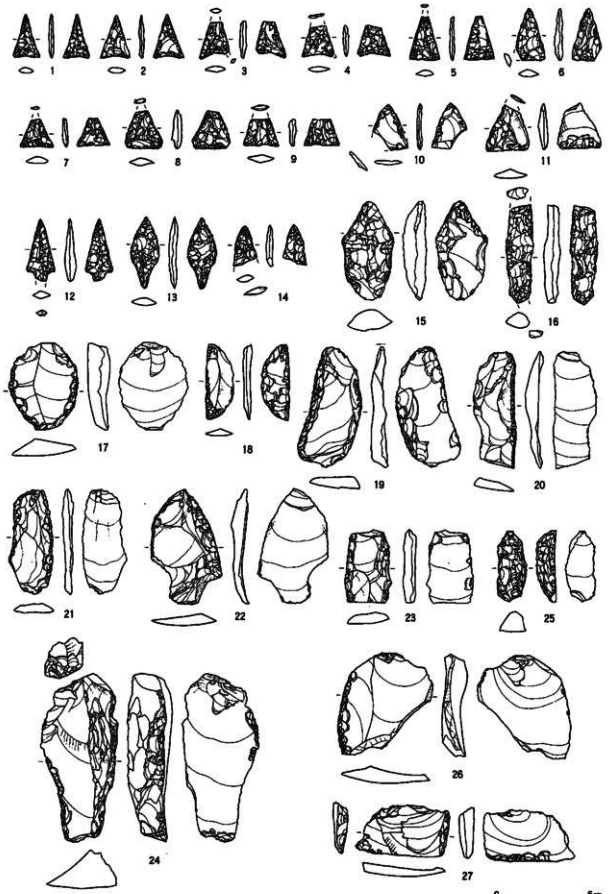
石鏃（図Ⅳ－３－１～14、図版17－１～15）

石鏃は15点が出土し、内14点を挿図に、全点を図版に掲載した。１～11は無茎で平面形が二等辺三角形もしくは三角形を呈するものである。１～６が長身で二等辺三角形、７・８が正三角形に近い形状である。基部は１～４が凹基、５～11は直線的である。１～７、９は押圧剥離による入念な調整が施され、厚さは0.4㎜以下に整形されている。10、11は調整が粗雑で素材面を広く残すことから未製品と考えられる。12、13は有茎のもので、12は二等辺三角形、13は木葉形である。12は無茎のものに比べ厚手である。13はカエシが不明瞭で、茎部が長く全体の３分の１を占めている。石材は１、４、７、８、14が黒曜石、他は全て頁岩である。

石槍（図Ⅳ－３－15・16、図版17－16・17）

石槍は２点出土し、全て図示した。15は幅広のものである。器体の上半部に張出し部を持ち、先端部にかけて主に加工が施されている。先端側は基部の可能性も考えられる。裏面側に素材腹面が広く残され、調整が散漫なことから未製品と考えられる。16は柳葉形で、剥離が比較的粗雑である。

掻器（図Ⅳ－３－17、図版17－18）



図Ⅳ－3　包含層出土の石器　(1)

図Ⅳ－4　包含層出土の石器　(2)

掻器は２点が出土し、内１点を図示した。17は剥片を素材とし、端部から両側縁にかけて調整を加えている。頁岩製である。

スクレイパー（図Ⅳ－３－18～27、図版17－19～28）

スクレイパーは13点が出土し、内10点を図示した。18～24は縦長剥片を素材とし、両側縁、もしくは片側縁のほぼ全縁を調整するものである。18、19は両面が調整されているが、19の腹面側への剥離は粗雑である。24、25は横断面が三角形となる分厚い剥片を素材とし、器体の中央部まで調整が及ぶものである。24の背面剥離面稜線からの剥離は、一部腹面側からの調整と腹面より新しく、二次加工と捉えられる。25の調整は全て腹面側から施されており、背面のほぼ全面を剥離している。26、27は横長剥片を素材としている。27は背腹両面に刃部が作出されている。石材は21が玉髄、他は全て頁岩である。

両面調整石器（図Ⅳ－４－28～30、図版17－29～31）

両面調整石器は６点が出土し、内３点を図示した。素材は28、30が剥片、29は不明である。いずれも粗く散漫な剥離が周囲から施されている。29は石核の可能性もある。石材は29が黒曜石、他は頁岩である。

ピエス・エスキーユ（図Ⅳ－４－31～52、図版18－36～62）

27点(個体数)が出土し、内22点を挿図に、全点を図版に掲載した。素材、剥離箇所、樋状剥離面の有無により８つに分類した。

剥片を素材とするもの。（Ａ～Ｄ類）

Ａ類：対向する2か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面がないもの。

Ｂ類：対向する2か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面があるもの。

Ｃ類：対向する4か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面がないもの。

Ｄ類：対向する4か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面があるもの。

片面を自然面に覆われ、礫素材の可能性があるもの。（Ｅ～Ｈ類）

Ｅ類：対向する2か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面がないもの。

Ｆ類：対向する2か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面があるもの。

Ｇ類：対向する4か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面がないもの。

Ｈ類：対向する4か所に剥離面があり、側縁に樋状剥離面があるもの。

なお、４箇所剥離の場合、縦横の設定は最終的に剥離を受けた方向、新旧関係が不明な場合は剥離が顕著な方向を石器の長軸とした。

Ａ類（図Ⅳ－４－31～36、図版18－36～42）

Ａ類は7点出土した。長幅比は0.6～1.5の間に収まり横長と縦長のまとまりがある。素材腹面が観察できるものは４点あり、内、石器の作業方向と素材の剥離方向が同じものは３点認められた。31は出土した中で最も小型である。

Ｂ類（図Ⅳ－４－37～39・43、図版18－43～46・52）

Ｂ類は６点出土した。長幅比（長さ／幅）は1.2以下４点と1.9以上２点に分かれるが、縦長のものは削片が剥離されることにより器体幅が減少している。腹面が観察できる４点は全て石器の作業方向と素材の剥離方向が同じである。38は下端に平坦面があり、この平坦面を打面として剥離が施されている。39は接合資料であり、石核61と接合している。

Ｃ類（図Ⅳ－４－40・41、図版18－47～49）

Ｃ類は３点出土した。長幅比は0.6～1.2の間にまとまる。平坦面からの剥離が全点に観察される。

全て素材の剥離方向と石器の作業方向が同じである。

D類（図Ⅳ－４－42・44～46、図版18－50・51・53～56）

Ｄ類は５点出土した。長幅比は0.8～1.5の間に分布し、特に1.2～1.4に４点がまとまる。全点に平坦面からの剥離が観察され、樋状剥離面を平坦面に利用したものが３点ある。素材の剥離方向と石器の作業方向が同じものは、確認できる３点全てに認められた。42と図版18-50、石器長袖の90度回転を繰り返しながら作業を行った可能性がある。

E類（図Ⅳ－４－47、図版18－57）

Ｅ類は１点のみである。小型で薄手のため剥片素材の可能性も強い。

F類（図Ⅳ－４－48・50・51、図版18－54・59・60）

Ｆ類は３点出土した。長幅比は1～1.8の間に分布し、特にまとまりはみられない。平坦面から剥離するものが１点ある。50・51は厚さ１cmを超え、他に比べ分厚い。48は接合資料で、裏面右側縁に削片が接合している。

H類（図Ⅳ－４－49・52、図版18－58・62）

Ｈ類は２点出土した。長幅比は1.1と2.6である。２点とも平坦面からの剥離が含まれ、特に49は４方向の全てにみられる。

石材は頁岩13点(33・34・40～45)、黒曜石２点(35・36)、玉髄12点(31・32・37～39・46～52)である。なお、図版18-63～65に掲載した資料は、ピエス・エスキーユの削片と考えられるものである。

Ｒフレイク（図Ⅳ－５－53～56、図版18－32～35）

Ｒフレイクは35点出土した。53・55は素材の両面に粗い剥離を加えるものである。54は素材の端部から側縁に散漫に調整を施したものである。56は左側縁を欠損するが対向する小剥離があり、４方向から剥離するピエス・エスキーユＣ・Ｄ類の可能性がある。石材は53・55が頁岩、54が玉髄、56が黒曜石である。

石核（図Ⅳ－５－57～62、図版18－66～71）

石核は８点出土した。57、58は主に上設打面から一定方向に作業が行われたものである。57の打面には、作業面からの小型剥離が観察されるが、打面調整を意図したものかは不明である。60、61は頻繁に打面を転移しながら作業を進行し、残核形状がサイコロ状となったものである。62は上下に打面を転移し粗割している。右側面に観察される縦長の作業面は、粗割の際に同時割れで発生した可能性が高い。石材は57～59が頁岩、60～62が玉髄である。57、60～62は接合資料である。

接合資料

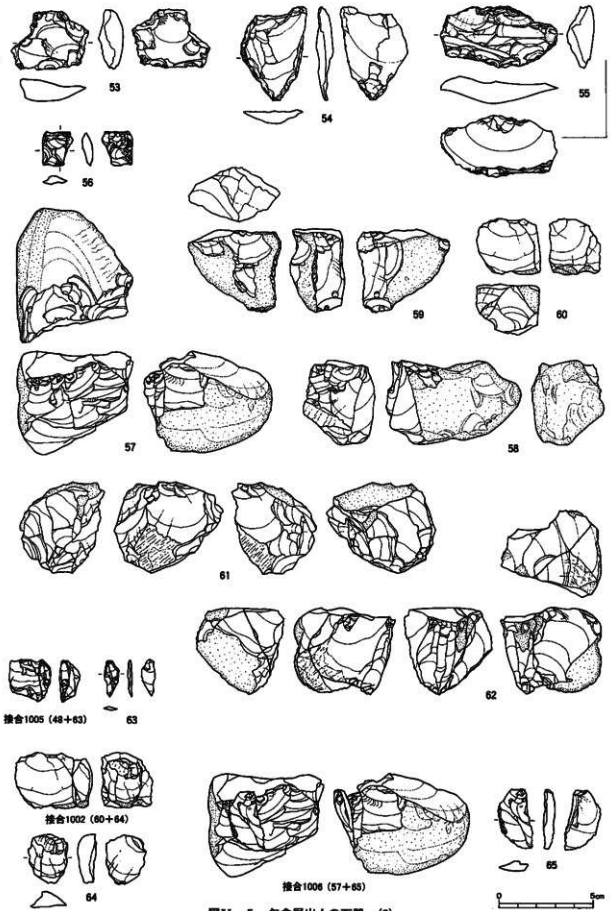
接合資料は剥離面接合するものが７個体確認された。石材は４個体が頁岩、３個体が玉髄である。各接合資料単位に説明する。

接合1005【48＋63】（図Ⅳ－５、図版19－１）

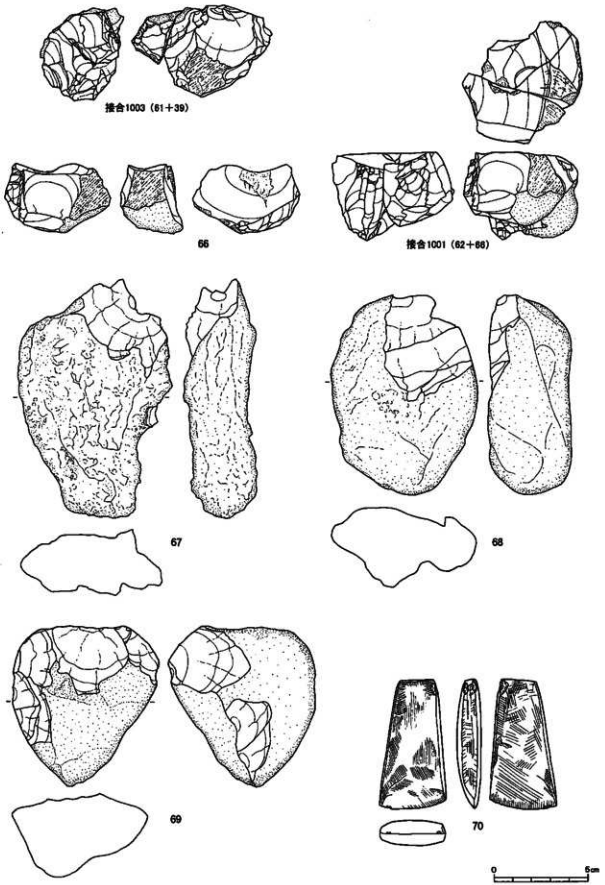
ピエス・エスキーユ48に削片63が接合した。63は48の右側縁側の樋状剥離面に接合するが、剥離は63の正面上端の中央付近から発生している。63は48の剥離後、さらに右側縁側に樋状剥離面が形成され、遺棄されている。この最終剥離には下端部からの反作用による割れも観察される。48の左側縁上半部には微細剥離が観察される。玉髄製である。

接合1002【60＋64】（図Ⅳ－５、図版19－２）

石核60に剥片64が接合した。上設の自然面打面から数回の粗い剥離作業を経て、最終的に64が剥離されている。60には下端にも裏面側の自然面を打面とした作業面があるが、正面及び右側面の作業面との新旧関係は不明である。64のような小型剥片はピエス・エスキーユの素材として利用されたのか



図Ⅳ－5　包含層出土の石器　(3)



図Ⅳ－6　包含層出土の石器　(4)

もしれない。玉髄製である。

接合1006【57+65】（図Ⅳ－５、図版19－３）

石核57に剥片65が接合した。65は単剥離打面で、57の打面に観察される小剥離は65の剥離後に施されている。65の剥離後、打面側への小剥離と相前後して、少なくとも８回の作業が行われている。頁岩製である。

接合1003【61+39】（図Ⅳ－６）

石核61にピエス・エスキーユ39が接合した。石核の打面を頻繁に転移しながら粗割を繰り返し、厚手の剥片を剥離したと観察される。39の剥離以後、少なくとも４回の剥離作業が行われている。また39はピエス・エスキーユとして使用されたが、素材の形状をほとんど変えることなく遺棄されている。玉髄製である。

接合1001【62+66】（図Ⅳ－６、図版19－4）

石核62に剥片66が接合した。66の剥離は節理からの潜在割れによると観察される。66の剥離後３回程度の作業を行うが、石器素材としては不向きな小剥片しか得られていない。全体的な作業は、打面を転移し粗割を繰り返すが、最終的に節理からの潜在割れにより石核を半割し終了したと考えられる。玉髄製である。

原石（図Ⅳ－６－67～69、図版19－４－76～78）

14点が出土したが、接合により６個体と確認された。大きさは６～12cm前後と小型である。図示していないものは粗割により破砕したもので、石材も質が悪いことから石器の素材は供給していないと考えられる。68はⅥ群ｃ類の破片資料（図Ⅳ-２-17･30･33）に近接して出土している。全て玉髄である。

磨製石斧（図Ⅳ－６－70、図版19－４－79）

磨製石斧は２点出土した。図示していない１点は刃部破片である。70は平面形が撥形で刃部は右上がりの偏刃となっている。刃部は両面から研出されるが、片刃の範疇で捉えられる。鎬付近を中心に全面が入念な研磨を受けている。緑色泥岩製である。

敲石・すり石（図Ⅳ－７－71～76、図版20－80～86）

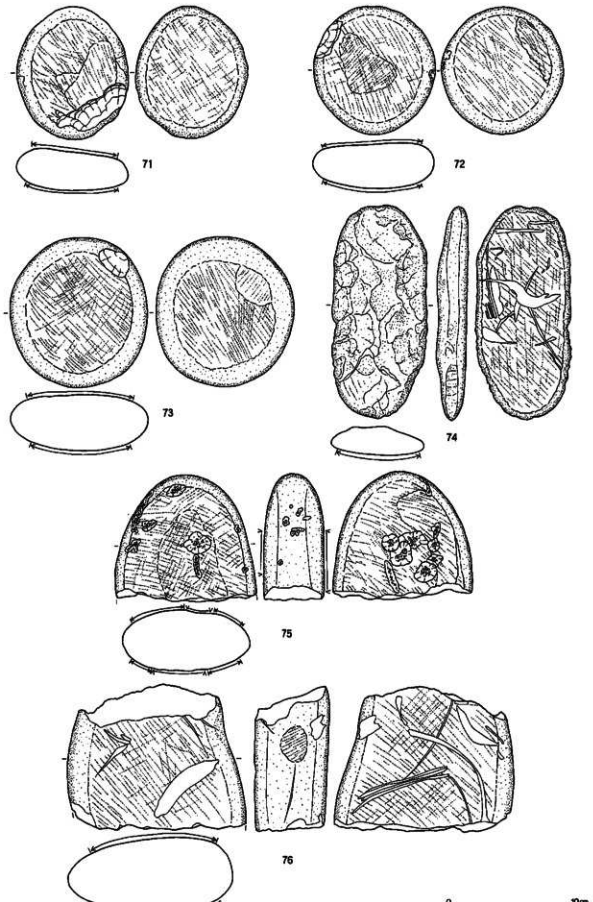
敲石は４点、すり石は８点出土している。敲石は明瞭な敲打痕が観察できるものが少なかった。75はすり石と敲石の複合石器で、分類上はすり面を敲打するため敲石とした。71～73は平面が円形で扁平なもので大きさもまとまっている。正裏の平坦面に擦痕が観察される。74は正面が剥離面で構成され、裏面に擦痕が観察される。76は大型の礫を素材に平坦な正裏面を擦り面に使用している。76の右側縁には円形に窪む擦痕が観察される。

（坂本尚史）

4　遺物の分布

(1)　概要

Ⅵ群の土器はⅢａ層～Ⅳ層で出土することから、遺物の上下移動が考えられ、そのため石器は層位による時期区分を困難と判断し、Ⅲ層～Ⅳ層を一括して扱うこととした。遺物の分布状況は１章の図Ⅰ-14に示した。分布はＭ・Ｎ55～58区、Ｋ・Ｌ・M64～67区、Ｒ・Ｓ50～51区にまとまりがみられ、Ｇ～Ｋ50～57区にはⅥ群ｃ類の土器が散発的に分布している。Ｈ・Ｉ・Ｊ・K60～63区は分布の空白範囲であるが、Ⅲｂ層まで削平を受けていることから本来的には遺物が分布した可能性もある。Ｍ・Ｍ・N55～58区、Ｋ・Ｌ・M64～67区でみられるように、Ⅵ群の土器と石器はそれぞれの分布のまとま



図Ⅳ－7　包含層出土の石器　(5)

りが重なり、共伴性が高いと考えられる。またR・S50～51区は石器が主体的に分布している。

（坂本尚史）

(2)　土器（図Ⅳ－8）

本遺跡のⅢ層・Ⅳ層から出土した土器の分布を図Ⅳ－8に示した。発掘区の中央部には土器の出土していない部分があるが、これは耕作によって縄文時代の包含層が削平されたことによるものだろう。60ラインの土層断面でみると、Ⅲb層まで削平された範囲は約12mにわたっている。Ⅰ層の遺物は発掘区の南西部を除いてほぼ全域から出土しており、そのほとんどはⅥ群土器なので、本来はこの部分にも分布していた可能性は少なくない。

Ⅳ群a類土器は発掘区の南東部、Ⅳ群b類土器は北西部のⅢb層から出土している。

Ⅵ群b類は発掘区の西部と北東部の2か所に分布している。K65区では2個体分（図Ⅳ－2－7・15）の破片が個体ごとにまとまっている（図Ⅳ－9）。

Ⅵ群c類のうち、後北B式は発掘区の西側と東側に集中域がある。

N56区は発掘区内で最も多く土器が出土しているが、それらはすべて小片で、接合できたものはほとんどない。Ⅵ群b類とc類が混在している。Ⅳ層から出土したものが多いのは、風倒木の影響が考えられる。

Ⅵ群c類のうち、後北C_2・D式は発掘区の南東部と北東部から出土している。

（中田裕香）

(3)　石器（図Ⅳ－10～12）

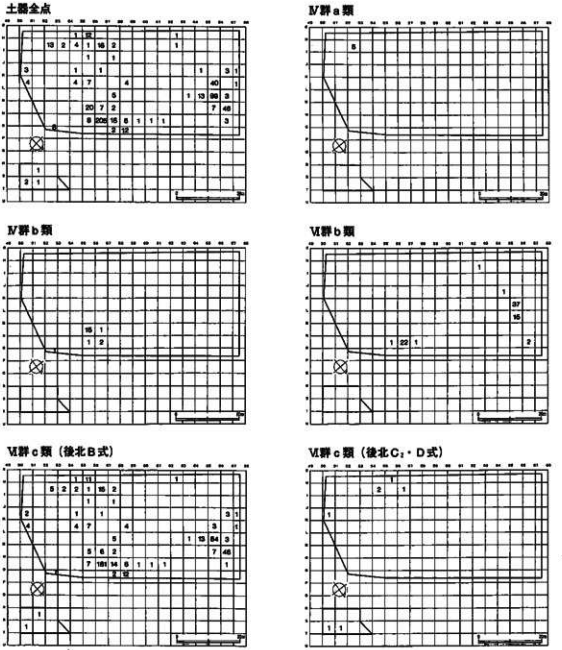
石器は上述のように遺物の上下移動が考えられることからⅢ層～Ⅳ層を一括して扱うこととした。石器の分布は石材別、器種別で観察を行い、両者の観察結果をまとめることとした。分布はM・N55～58区、K・L・M64～67区、R・S50～51区にみられる。説明のため便宜的に各分布のまとまりを、M・N55～58区はブロック1（Sb-1）、K・L・M64～67区はブロック2（Sb-2）、R・S50～51区はブロック3（Sb-3）と呼称する。各ブロックの石器出土量はブロック1が21点・1,614.8g、ブロック2が35点・11,607.3g、ブロック3が16点・68.2gである。ただし石器ブロック1、2に関しては、単体の重量が重い砂岩製の礫石器を含むため、以下、剥片石器のみで求めた数値を括弧内に記載する。

石材別の分布状況（図Ⅳ－10）

石器石材は頁岩、黒曜石、玉髄、安山岩、緑色泥岩、砂岩、チャートがみられた。以下主要な石材として捉えられる頁岩、黒曜石、玉髄について個別に説明を加える。

頁岩　頁岩が各ブロックで占める割合は、ブロック1では点数42.9（47.4）%・重量0.9（44.2）%、ブロック2では点数42.9（46.9）%・重量1（19.6）%、ブロック3では点数50（53.3）%・重量20.8（78.0）%である。分布の特徴はブロック2で散発的に、ブロック3でまとまって出土したことがあげられる。頁岩は各ブロックに分布し、剥片石器でみれば点数では半数近く、重量では2割から半数以上を占める。

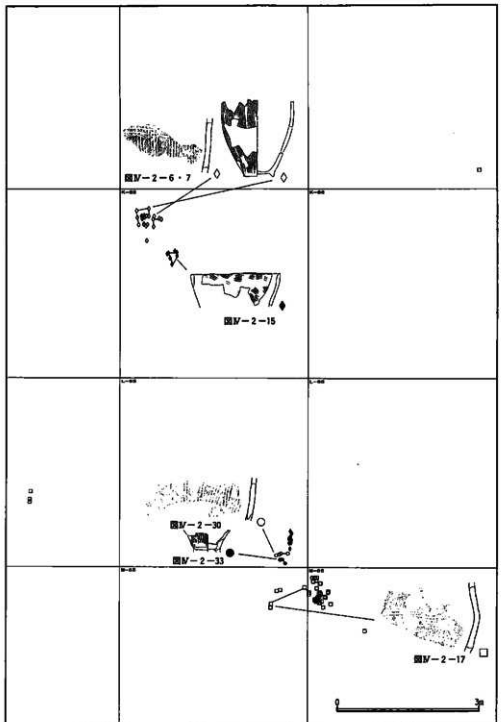
黒曜石　黒曜石が各ブロックで占める割合は、ブロック1では点数47.6（52.6）%・重量1.1（55.8）%、ブロック2では点数2.9（3.1）%・重量0.01（0.3）%、ブロック3では点数12.5（13.3）%・重量1.2（4.4）%である。分布の特徴はブロック1で微細な剥片とトゥールがまとまって出土したことがあげられる。一括遺物も含めれば点数で9割以上が黒曜石で占められ、ブロック1内での主要な石材として認められる。

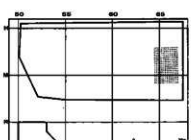


図Ⅳ－8　包含層出土土器の分布

表Ⅳ－1　包含層出土土器一覧

	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳ～Ⅴ	Ⅵb	Ⅵc	Ⅵd	Ⅶ	合計
Ⅰ層	1	1	3	2	65	1323	1	3	1399
Ⅲ層		8	19		73	408			508
Ⅳ層			1		7	78			86
その他						12			12
合計	1	9	23	2	145	1821	1	3	2005





図Ⅳ－9　包含層出土土器の接合状況

玉髄　玉髄が各ブロックで占める割合は、ブロック１では0%、ブロック２では点数40(43.8)%・重量４(78.1)%、ブロック３では点数12.5(13.3)%・重量0.3（1.1）%である。分布の特徴はブロック２で原石、ピエス・エスキーユ、剥片がまとまって出土したことがあげられ、ブロック２内では主要な石材として認められる。

器種別の分布状況（図Ⅳ－11・12）

石鏃、石槍、両面調整石器、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、Ｒフレイク、剥片、石核、原石、すり石、敲石、台石・石皿の各器種について分布状況を示した。石鏃は各ブロックに三角形鏃が出土している。スクレイパーはブロック２に３点がまとまって出土している。ピエス・エスキーユは各ブロックに出土している。原石はブロック２及び発掘区の南側で出土している。礫石器はすり石が各ブロックに、台石・石皿がブロック２に出土している。

石器の分布状況について

各器種内及び各器種間の遺物が同時期であるかは不明である。よって、まず出土状況と石器の形態から共伴の妥当性を検討し、共伴性の高い遺物の中で分布状況を観察する必要がある。上述した石器ブロックと石材の関係から各ブロックはより特定の石材と結びつく傾向があり、石材搬入から作業の単位を示す可能性がある。よって同一ブロック内で出土した石器に関しては共伴石器の可能性が高く、こうした観点から各ブロックに対し観察を行ってみた。

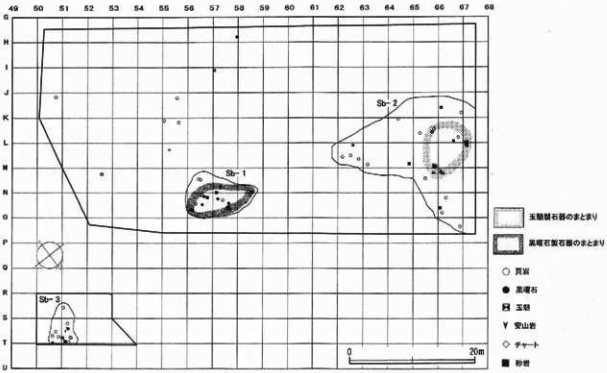
ブロック１　黒曜石製の石鏃、ピエス・エスキーユ、Ｒフレイクが多数の微細な剥片を伴って出土し、これにすり石が加わる。黒曜石の二次加工を中心とした作業が行われたことが推測される。

ブロック２　玉髄製石器を中心にした分布がみられ、同石材のピエス・エスキーユ、原石が出土している。主にピエス・エスキーユは玉髄を石材にすることからも、玉髄原石を持ち込みピエス・エスキーユを製作、使用した可能性がある。玉髄原石はⅥ群の土器と共伴している。また、ブロック２ではスクレイパーが３点出土しており、スクレイパーに関連する作業を行ったことが推測される。

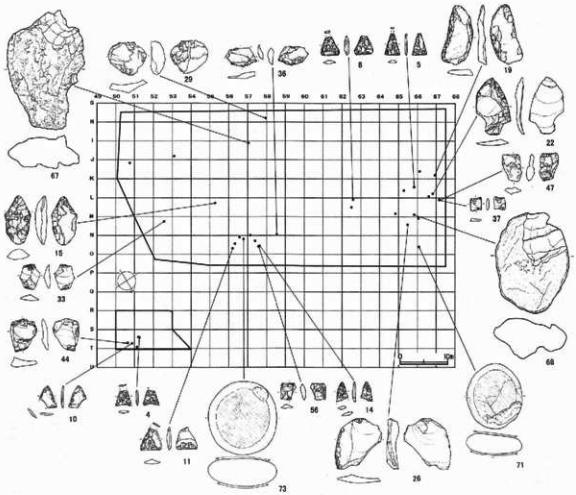
ブロック３　頁岩製の石鏃、ピエス・エスキーユが剥片を伴って出土している。頁岩製石器は母岩のまとまりが少なく、多種多様な石質が認められる。これは他のブロックにも共通しており、発掘区内では簡単な剥片剥離作業しか行われなかったことが推測される。

各ブロックはおおよそⅥ群の土器の分布に符合し、共伴性が高いことが考えられる。

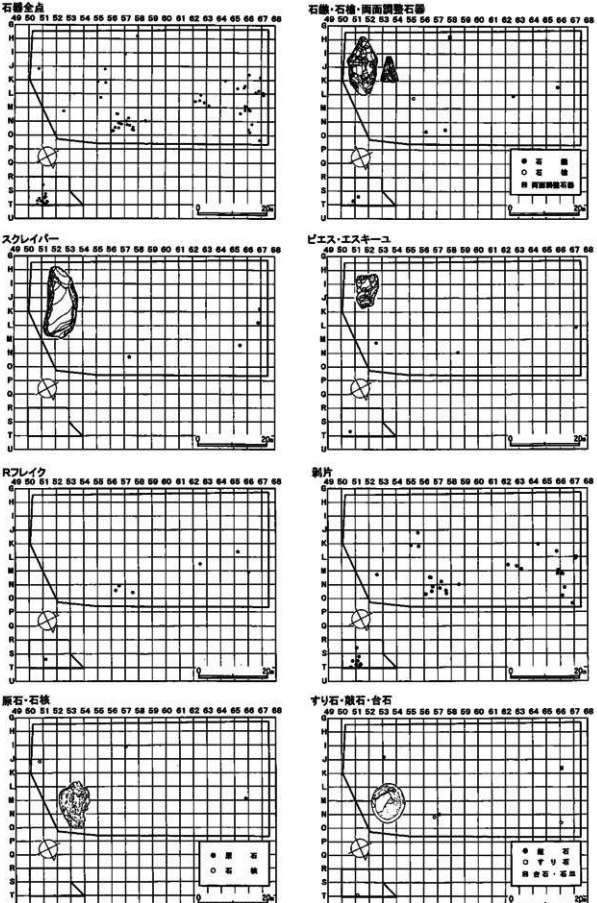
（坂本尚史）



図Ⅳ－10　石材別分布状況



図Ⅳ－11　石器（トゥール）の分布



図Ⅳ－12　器種別分布状況

V　調査の成果と課題

1　続縄文土器について

本遺跡から出土した土器はほとんどが続縄文土器で、主体は後北B式に相当するものである。南川Ⅳ群（註１）に相当する恵山式土器や後北C_2・D式に相当するものも出土している。

本遺跡の恵山式土器は器形の全体が明らかなものはないが、甕形土器が多い。口縁部が内湾気味に立ち上がるもの、外反するもの、体部に張りのあるもの等がある。図Ⅳ－１－20は口縁の内傾する深鉢形土器と考えられる。口縁部に横走する縄文の施されたものや、逆三角形状の無文部があるものは鉢形ないし浅鉢形土器の可能性が大きい。文様要素としては、帯状縄文、沈線文、列点文・短刻線文、刻み目等がある。帯状縄文には沈線で縁取りされたものと縁取りのないものがある。沈線文には口縁に平行なものや小波状・連弧状等がある。文様構成は簡略化される傾向にあるようである。内面はみがかれているが、ざらつきのあるものもみられる。肉眼による観察ではあるが、約半数のものの胎土には海綿骨針が含まれている。

瀬棚町南川遺跡（上野・羽賀・田部ほか　1983）や奥尻町米岡第２遺跡（佐藤編　1978）・青苗B遺跡（木村編　1999）等では、甕形土器の体部上半に横走縄文とそれを縁取る沈線によってX字状やC字状の文様の描かれたものが出土しているが、本遺跡では確認されておらず、これらよりも先行する段階の土器と考えられる。後北式土器との関係では、後北A式に併行するものである。

八雲町内ではシラリカ遺跡（柴田　1988）、山崎１遺跡（柴田　1988）、山越６遺跡（八雲町教育委員会編　1988）等からこの頃の土器が出土している。

本遺跡から出土した後北B式は深鉢形、浅鉢形、壷形土器からなる。深鉢形土器の器形は口縁がわずかに開く倒鐘形のものが多い。口唇直下に刻み目のある隆起線がめぐり、口縁部から胴部上半にかけて横走する帯状縄文や列点文の施されたもの（図Ⅳ－２－16～19）もあるが、多くは隆起線を組み合わせて菱形や凸レンズ状等の文様が構成されている。隆起線は上下をなでつけて整形されたものが多い。図Ⅳ－２－21の菱形状の文様はゆがみが大きく、割付も不均等である。口縁に刻み目のある隆起線が施され、その下位には横走縄文の地に列点文や平行する多重沈線の加えられたもの（図Ⅳ－１－24～27）も出土しているが、このような土器は恵山式と後北式の両方の要素をもったものといえよう。壷形土器には吊り耳のあるもの（図Ⅳ－１－47・48）や赤色顔料の塗彩されたもの（図Ⅳ－１－44～47）がある。後北式の内面調整はミガキだが、ざらつきのあるものも少なくない。約半数のものの胎土には海綿骨針が含まれている。黒雲母や砂粒等も胎土に含まれる量の多いものや少ないものがあり、いくつかの異なった胎土が用いられたと考えられる。

道央部で誕生した後北式土器はC_1式以降、南に向かっては道南地方から本州の北部まで広がりを示すが、それ以前の資料は散点的にしか報告されていない。

道南地方における後北A式は、末期の頃のものが伊達市南稀府５遺跡から出土している（大沼・千葉・田才ほか　1983）。八雲町内では、栄浜１遺跡で「後北A～B式ぐらいに相当する」ものや「後北A式土器に相当する可能性」のあるものが報告されている（柴田　1991）。七飯町大中山13遺跡では南川Ⅳ群土器の集中区域から「後北A式に似た土器」が出土しており、両者は共伴する可能性が強いと考えられている（㈶北海道埋蔵文化財センター編　1995）。奥尻町青苗B地点遺跡から出土した土器もこの頃のものであろう（千代　1965）。

後北B式は、八雲町山越６遺跡（八雲町教育委員会編　1988）・栄浜１遺跡（八雲町教育委員会編

1987a、柴田 1988・1991）、七飯町聖山遺跡（吉崎・直井・松岡編　1979）、松前町白坂第4地点遺跡（久保・井上・石本ほか　1983）等に出土例がある。

山越6遺跡からは、口縁と平行な隆起線の施されたものや菱形や弧線状の隆起線で文様の構成されたものが出土している（八雲町教育委員会編　1988）が、これらは本遺跡出土の土器に類似している。栄浜1遺跡から出土した復原土器（柴田　1988・1991）は突起の下やそれらの中間に凸レンズ状の隆起線を縦位に重ね、横位の隆起線でつないだものである。器面に密集して施されたこれらの隆起線は細く、断面は凹角い。破片資料には菱形や凸レンズ状の文様の施されたものがある。柴田によれば、「隆起線で描かれる文様の幅が胴部中央まで及んでおり、文様構成などもC_1式土器に近似しており、B式でもC_1式に近い時期のものと考えている」という（柴田　1991）。聖山遺跡の資料は頸部に縦および斜位の短沈線が描かれている（吉崎・直井・松岡編　1979）。

野田生5遺跡も含め、道南地方の遺跡から出土した後北B式土器には、繁縟に施された隆起線や列点文、隆起線によって構成された文様の不均等で粗雑な刻付、短沈線や多重沈線といった、道央地方の土器とは異なる様相をもつものもある。これらは道南地方の人々の間に後北式土器が受容されていく中で生じた地域色とみてよいのではないだろうか（大沼　1982・石本　1984）。

次に東北地方の例を見てみよう。青森県では六ヶ所村千歳遺跡(13)（青森県教育委員会　1976）や脇野沢村九艮泊岩陰遺跡（江坂・高山・渡辺　1965）から出土した土器が「後北B式に近似し、その前後」（大沼　1978）のものとして知られていた（註2）が、最近では青森市小牧野遺跡（小牧野遺跡調査会・青森市教育委員会編　1996、青森市教育委員会編　1998）からも後北B式相当と考えられる土器が出土している（註3）。横走または斜行する帯状の縄文が沈線や列点文で縁取りされたものや、V字状の沈線を連繋させて菱形状の文様を描くもの等がある。これらの内面はみがかれているが、ざらつきがある。報告者は「隆起線を伴う土器に関しては、基本的な文様要素は類似するものの、文様の組み合わせ方及び製作過程、調整など北海道のものとはかなり異なっているものもあることから、搬入品ではないものがかなり含まれている」と推定している（上野　1998）。

本遺跡から出土した後北C_2・D式のうち、図Ⅳ－2－37～41は大沼が後北C_2・D式を4段階に細分したうちの2番目の「一般的なC_2・D式」（大沼　1982）に含まれるものである（註4）。また、石本による道南地方の「江別C_2・D式」を3つの段階に細分した編年では、中葉に相当する（石本　1984）。胎土には海綿骨針が含まれている（註5）。

八雲町内ではトコタン2遺跡（野村　1982）、台の上遺跡（八雲町教育委員会編　1987b）、大新遺跡（八雲町教育委員会編　1998）等から後北C_2・D式が出土している。トコタン2遺跡の土器は小片だが、台の上遺跡と大新遺跡の資料は大沼の「一般的なC_2・D式」（大沼　1982）の段階のものである。

本遺跡ではⅠ層から弥生系土器が1点出土している（図Ⅳ－1－23）。不均等な撚り合わせの縄による縄文の施された口縁部の破片である。

八雲町内では台の上遺跡（八雲町教育委員会編　1987b）で後北C_2式と同じ層（註6）から(1)交互刺突文と沈線文の施されたものや(2)不均等な撚り合わせの縄を用いて羽状縄文が施されたものが出土している。本遺跡の土器は(2)に類似したものであろう。

(1)は上野によって仮称「北海道2類」、(2)は同「北海道3類」（註7）の例としてあげられている。両者は時期的に近く、「福島県の編年でいう踏瀬大山式から十王台式に対応する時期」のものであり、後北C_2・D式との関係（註8）では、大沼の分類の「C_2式初」や「一般的なC_2・D式」（大沼　1982）に共伴する可能性が極めて高いと考えられている（上野　1992）。一方、小林によれば、「北海道側

での江別C_1式から江別C_2式の変化に対応する「北海道２類」から「北海道３類」への変化」がみられるという（小林　1993）。近年は更にこれらと古式土師器との関係について検討が行われている（石井　1994・木村　1999等）。

北海道内で出土した弥生系土器は現在までのところ、石狩低地帯と後志・檜山管内の日本海側に多く分布し、八雲町以東の太平洋側では出土していないようである（乾　1990等）。この空白の意味するものが北大Ⅰ式の時期以降にはどのように変化したのか、土師器の分布の広がりとも重ね合わせると、興味深い問題である。

（中田裕香）

註　1　南川Ⅳ群は、1976年刊行の報告書では文様構成の簡略化の程度によってａ類とｂ類の２つに分類されている（高橋・内山・土田ほか　1976）。1983年の報告書（上野・羽賀・田部ほか　1983）では文様構成を主に10類に細分されたが、それらの関係や新旧については言及されていない。

2　大沼は千歳遺跡(3)の土器を「帯状に縄文を沈線で区画する恵山式末期の文様が施されていて、後北式というよりは恵山式というべきもの」とも述べている（大沼　1982）。これに類似した恵山式土器は松前町白坂第４地点遺跡等から出土している（久保・井上・石本ほか　1983）。

3　小牧野遺跡では南川Ⅳ群や後北C_1式に相当するものも出土し、それらの中には胎土に海綿骨針の含まれたものが少量認められる。

4　上野は「一般的なC_2・Ｄ式」を「古」と「新」の２つの段階に分けている（上野　1992）が、八雲町内から出土した後北C_2・Ｄ式は破片資料のみのため、細分は行わなかった。

5　井上は胎土に海綿骨針の含まれた後北C_2・Ｄ式について、北海道・秋田県・岩手県の例を挙げている（井上　1995）。

6　この層からは後北C_1式も出土しているが、弥生系土器の出土した発掘区とは一致しない（八雲町教育委員会編　1987ｂ）。

7　上野の定義では「撚糸文を主に用いた地文が全面に施されたもの」とある（上野　1992）。

8　石井もほぼ同様な見解を示している（石井　1994）。

2　石器について

今年度の調査では続縄文時代の後北Ｂ式土器が中心に出土し、点取り遺物の石器も出土状況から同時期の所産であると判断した。今回は野田生５遺跡で主体的な石器として捉えられ、且つ不定形石器としてあまり取り上げられることのないピエス・エスキーユについて若干の考察を行ってみたい。ピエス・エスキーユは27点（個体）が出土し、内20点がⅠ層出土であるが、Ⅰ層はⅡ～Ⅲａ層を主に撹乱した層であること、遺物が続縄文時代を主体とすることから、全て同一時期とみなし分析を行った。

ピエス・エスキーユは日本では芹沢長介、岡村道雄らによって初めて注目された。芹沢は観察される剥離面が石器素材と成りえる剥片を剥離していないこと、共伴する台石、敲石がピエス・エスキーユの製作に密接に関与したと推測されること等から両極剥離技法により製作された目的的な石器とした(1974)。岡村は諸々の特徴的な属性を指摘することによりピエス・エスキーユを明確化し、さらに製作技術、年代、分布、機能にまで言及した。両者の研究は、それまで石核や不定形石器として看過

されてきたピエス・エスキーユを各地域の各時期に普遍的に存在する器種として認識したものであった(岡村1976)。阿部朝衛は峠下聖山遺跡の資料を検討し、ピエス・エスキーユにみられる両極剥離は製作技術ではなく、使用法によるものであると考察した（阿部1979）。また前述の観点からピエス・エスキーユの各形態が使用過程を示すものとし、機能喪失した状態を形態的に捉えた。さらに阿部はバイポーラテクニックが各時期、各地域に出現することに着目し、バイポーラテクニック自体はピエス・エスキーユの認定条件とはならないことを指摘した（阿部1983）。以上のような研究を概略的に踏まえ、(1)石器の形態と(2)使用石材の２点を主題に観察を行った。

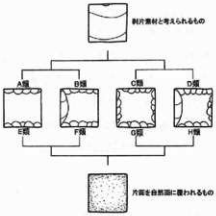
(1)石器の形態について（主に遺棄の形態として）

「形態は四辺形を呈する。」（芹沢1974）と定義されるように、野田生５遺跡出土のピエス・エスキーユも全て四辺形を呈している。今回は石器の長幅比（長さ／幅）、断面形状、二次的剥離部（以下刃部）の角度に対して観察を行った。ここで用いる刃部とは、両極剥離打法によって剥離面が生じた部位であり、直接的に被加工物に接する機能部と加撃面（打面）を含む。出土した資料から石器の軸を頻繁に転回させたことが観取され、また、資料からでは加撃部と直接的機能部を判断できないことから便宜的に二次的剥離部を刃部と呼称する。Ⅳ章で記載したピエス・エスキーユの分類模式図を図Ｖ－１に示した。

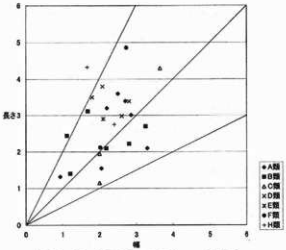
長幅比を図Ｖ－２に散布図で示した。長幅比はおおよそ0.5から２の間に分布し、1.5以下のものが全体の約８割を占める。各類型にまとまりは見出せないが、Ｂ・Ｄ・Ｆ・Ｈ類は比較的２に近いものが多い。これは樋状剥離面が生じたことにより幅が減じたためと考えられ、樋状剥離面を持たないＡ・Ｃ・Ｅ類は７割が長幅比１～1.4に分布している。本来的には正方形に近い形状で機能した石器の可能性がある。大きさは２～４cm（Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｈ類については長幅の平均）のものが７割を占める。主に４～２cmの間で遺棄し、２cmを下回る段階では有効に機能しないことが考えられる。

断面形状は図Ｖ－３に示すように分類した。断面は刃部のほぼ中央で観察し、結果を図Ｖ－４に示した。紡錘形は14点あり、全体の52％を占める。特に刃部が２か所であるＡ・Ｂ類に10点が集中している。Ａ・Ｂ類に断面紡錘形が多いのは、作業の進行にともない素材の両面が剥離され、角度が鋭角化に向かうことが考えられる。楔形は11点、41％で、残りの半数近くを占め、Ｄ・Ｆ類に多くみられる。これは平坦な樋状剥離面を刃部に設定したことが原因にあげられる。断面が先鋭な刃部を持つもの（紡錘形と楔形）は全体の93％に及ぶが、ピエス・エスキーユが遺棄されたものであれば、先鋭な断面形とは機能を失った形状とも捉えられる。半数の資料（楔形・四角形）が持つ平坦な面が刃部として使用されるのはそれが有効な形状であり、加撃により発生した樋状剥離面を利用するのはこれを示すものであろう。また、素材の剥離方向と作業方向が同一なものが10点と多数認められるのは素材打面を刃部に利用したのではないだろうか。

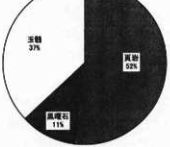
では、先鋭な刃部はどの段階で機能を喪失したのか。刃部（より鋭角な側を選択）断面の角度の計測を行った。なお、角度は５度間隔で計測した。刃部角は50～70度の間に全体の７割が分布する。表Ｖ－１は刃部角と長さの相関関係を示したものである。大きさ３cm以下のものは各刃部角度に散布することからも、むしろ大きさが機能を喪失した原因と考えられよう。しかし、３cmを上回る資料は40～70度に12点がまとまる傾向がある。本来的には３～５cmの資料のように40～70度に刃部角がまとまり、機能していたが、作業の進行に伴い３cm以下のもののように刃部角が分散していったのではないだろうか。ピエス・エスキーユは使用によって産出されるもので、使い減りを前提とした便宜的な石器である。石器がたとえ機能を保持していようとも作業の終了と共に遺棄される可能性は高く、こうした点を踏まえながら理解を行う必要があるだろう。



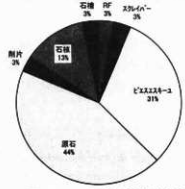
図Ⅴ－1　ピエス・エスキーユ分類模式図



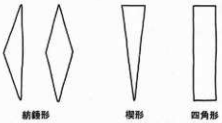
図Ⅴ－2　ピエス・エスキーユ長幅比



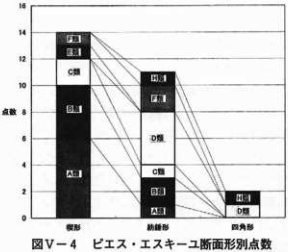
図Ⅴ－5　ピエス・エスキーユの石材別比率



図Ⅴ－6　玉髄の器種別比率



図Ⅴ－3　ピエス・エスキーユ断面形状の分類



図Ⅴ－4　ピエス・エスキーユ断面形別点数

表Ⅴ－1　ピエス・エスキーユ刃部角と長さの点数一覧

刃部角＼長さ	0~1	~2	~3	~4	~5	合計
0~20	0	0	0	0	0	0
~30	0	1	2	0	0	3
~40	0	1	1	1	5	8
~50	0	1	2	0	0	3
~60	0	0	2	1	1	4
~70	0	1	2	1	3	7
~80	0	1	0	0	0	1
~90	0	0	1	0	0	1
合計	0	5	10	3	9	27

表Ⅴ－2　器種別及び石材別点数一覧

	チャート	安山岩	玉髄	高硬石	砂岩	頁岩	緑色泥岩	総計
石鏃	0	0	0	6	0	9	0	15
石槍	0	0	1	1	0	0	0	2
掻器	0	0	0	0	0	2	0	2
スクレイパー	0	0	1	1	0	11	0	13
両面調整石器	0	0	0	2	0	4	0	6
ピエス・エスキーユ	0	0	10	3	0	14	0	27
RFフレイク	1	1	1	6	0	25	0	34
剥片	0	0	1	0	0	3	0	4
石核	0	0	4	0	0	4	0	8
細石	0	0	14	0	0	0	0	14
石斧	0	0	0	0	0	0	2	2
石錘	0	0	0	0	1	0	0	1
敲石	0	0	0	0	4	0	0	3
ザリ石	0	3	0	0	6	0	0	9
台石・石皿	0	0	0	0	4	0	0	2
総計	1	4	32	19	14	72	2	145

まとめれば以下のようになる。(1)刃部に平坦面が使用される。(2)長さ３～５㎝以上、刃部角40～70度で機能する。(3)３㎝以下になると有効に機能しなくなり、また刃部角も一定でなくなる。

平坦面に関しては、刃部に使用される平坦面は加撃面として利用すれば力を効率よく集中させて伝達することができる。また、平坦面を機能部に利用しても加撃の際、ピエス・エスキーユを据える角度により、面として機能するのか、縁辺として機能するのかが変化してくる。平坦面を利用するメリットを考察することは、機能を模索する手掛かりになるだろう。少ない属性観察のなかで考察を行ったが、今後さらに使用痕や破損の特徴などにも着目し、ピエス・エスキーユの機能について検討していきたい。

(2)使用石材について

ピエス･エスキーユに使用される石材は、頁岩、黒曜石、玉髄があり、その比率を図Ⅴ-５に示した。頁岩が最も多く52%、玉髄が37%、黒曜石が11%である。トゥールに使用される石材においてもこの三者が最も多く、ピエス・エスキーユには比較的量の多い石材が選択されている。こうした傾向は前述した便宜的な石器の性格と矛盾しない。しかし表Ⅴ-２のように、頁岩、黒曜石ではスクレイパー、石鏃、掻器などピエス・エスキーユ以外の器種にも結びつきがみられる。図Ⅴ-６のように玉髄が石器石材に利用される場合、圧倒的にピエス・エスキーユとの結びつきが強い。こうしたことからは、(1)玉髄がピエス・エスキーユの石材として適した石質を持つため好んで用いられたこと、(2)玉髄の石質がピエス・エスキーユ以外の器種には不適当であること、(3)特定の器種を産出する作業が石材環境に影響されながら行われたことなどが考えられる。ただし、ピエス・エスキーユに適した石材を検証するには、ピエス・エスキーユの機能と対象物を特定し、実験作業を行う必要があり、今回は時間的制約もあるため行っていない。上記の推測をもとに、玉髄とピエス・エスキーユの関係について若干考察したい。

剥片などを含めた各石材の点数は、玉髄96点・2,218.2ｇ、頁岩357点・2,954.1ｇ、黒曜石は195点・130.7ｇである。この内、石核などを除くトゥールに加工されたものは玉髄13点（13.5%）・104.2ｇ（4.7%）、頁岩65点（18.2%）・678.8ｇ（22.9%）、黒曜石19点（9.7%）・74.4ｇ（56.9%）である。同様に各石材の剥片の比率をみると、玉髄が点数33.3%・重量18.3%、頁岩が点数79.8%・重量62.8%、黒曜石が点数90.2%・重量43.1%であった。行われた作業内容にも左右されるが、頁岩と黒曜石が剥片を多量に出土するのに対し、玉髄は剥片と石器が少なく、逆に原石や石核が多いことが読み取れる。そして上述したように玉髄製のトゥールは90%がピエス・エスキーユとなっている。

玉髄の剥片とピエス・エスキーユに対し石質の観察をおこなった。その結果、打面が欠損する、打面の位置やリングが不明瞭である、階段状剥離や折れが発生している、節理を含む、主要剥離面が力の分散により複雑な形状をしているなどの状態が顕著に観察され、全点がいずれかの特徴を保持していた。剥離の際に不規則な割れや折れが生じやすく、調整加工を含む通常の剥離が難しい石質であると判断できる。

以上の観察結果から野田生５遺跡で出土した玉髄は、ピエス・エスキーユ以外の器種には適さず、不定形且つ便宜的石器であるピエス・エスキーユに対しては石材を供給しやすかったと考えられる。原石・石核・素材を遺跡内に持ち込み、必要に応じてピエス・エスキーユを産出する作業を行い、作業終了後は遺跡内に遺棄したのであろう。

出土点数から、ピエス・エスキーユを使用した作業は遺跡内では主要な作業であったとみられるが、頁岩や黒曜石に比べ、玉髄はもっとも安易に消費できる石材であるのだろうか。渡島地方周辺における玉髄の産地は、長万部町茶屋川付近から今金町花石、美利河にかけての地域が知られているが、遺

跡との距離は直線で30kmほどである。この地域で採取できる玉髄は非常に良質で、今金町神丘２遺跡などでは後期旧石器時代の石刃石器群にも玉髄が多用されている。茶屋川付近では野田生５遺跡に類似した石質の玉髄も容易に採取が可能であるが、30km以上の遠距離から便宜的石器のために質の悪い石材を選択、採取したとは考えにくい。横山英介氏のご教示によれば、八雲町内の河川流域を対象にした石材調査の結果、ルコツ川、遊楽部川、野田追川で石英岩の円礫が採集できるようである。石質を何う限りでは野田生５遺跡出土のものに類似しているようだが、実見はしていない。

石器の性格からも野田生５遺跡のピエス・エスキーユはこうした在地の石材を使用した可能性を考えたい。ピエス・エスキーユに関しては、他遺跡との形状や石材比率に関する比較や、遺跡周辺の石材環境を調査することにより、今後も検討を重ねていきたい。

（坂本尚史）

引用・参考文献

青森県教育委員会　1976　『千歳遺跡（13）発掘調査報告書』（『青森県埋蔵文化財調査報告書』第27集）　青森県教育委員会

青森市教育委員会編　1998　『小牧野遺跡発掘調査報告書』Ⅲ（『青森市埋蔵文化財調査報告書』第40集）　青森市教育委員会

阿部朝衛　1979　「Ⅲピエス・エスキーユ（楔形石器）」『峠下聖山遺跡』七飯町教育委員会

　　1983　「バイポーラテクニックの技術的有効性について」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会偏　東出版寧楽社

石井　淳　1994　「東北地方北部における縄文土器の編年的考察」『筑波大学　先史学・考古学研究』第５号　筑波大学歴史・人類学系

石田正夫　1978　「八雲地域の地質」地域地質研究報告５万分の１図幅札幌(4)第68号　地質調査所

石本省三　1984　「北海道南部の縄文文化」『北海道の研究1　考古篇1』　清文堂

乾　芳広　1990　「北海道における天王山式期の現状と課題」弥生時代研究会編『「天王山式期をめぐって」の検討会　記録集』　弥生時代研究会

井上雅孝　1995　「海綿骨針を含む縄文土器について－胎土から見た後北C_2・D式土器の一視点－」『みちのく発掘－菅原文也先生還暦記念論集－』菅原文也先生還暦記念論集刊行会

上野秀一　1982　「石器」『縄文文化の研究』第６巻縄縄文・南島文化　雄山閣出版株式会社

　　1992　「北海道における天王山式系土器について－札幌市K135遺跡４丁目地点出土資料を中心に－」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤　稔先生還暦記念会

上野秀一・羽賀憲二・田部　淳ほか　1983　『瀬棚南川』　瀬棚町教育委員会

上野隆博　1998　「第Ⅵ群土器について」『小牧野遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　青森市教育委員会

江坂輝弥・高山　純・渡辺　誠　1965　「青森県九戸泊岩陰遺跡調査報告」『石器時代』第７号　石器時代文化研究会

大沼忠春　1978　「東北地方北部の後北式土器について」『考古風土記』第３号

　　1982　「後北式土器」『縄文土器大成５－縄縄文』　講談社

　　1989　「縄縄文土器様式」『縄文土器大観４　後期　晩期　縄縄文』　小学館

大沼忠春・千葉英一・田才雅彦ほか　1983　『南稀府５遺跡－北海道立伊達緑丘高等学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』　北海道文化財保護協会

岡村道雄　1976　「ピエス・エスキーユについて－岩手県大船渡市碁石遺跡出土資料を中心として－」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社

　　1979　「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例－その１－」『東北歴史資料館　研究紀要』第５巻　東北歴史資料館

木村　高　1999　「東北地方北部における弥生系土器と古式土師器の並行関係－縄縄文土器との共伴事例から－」『研究紀要』第４号　青森県埋蔵文化財調査センター

木村哲朗編　1999　『菅苗Ｂ遺跡～萬徳寺再建に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～』　奥尻町教育委員会

久保　泰・井上真理子・石本省三ほか　1983　『白坂　国道228号線改良拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書』　松前町教育委員会

小林　克　1993　「江別C_2式土器の本州分布をめぐって－「東北縄縄文式」の視点から－」『先史

考古学研究』第4号
小林博昭　1973　「バイポーラテクニックについて」『考古学ジャーナル』78　ニューサイエンス社
小牧野遺跡発掘調査会・青森市教育委員会編　1996　『小牧野遺跡発掘調査報告書』（『青森市埋蔵文化財調査報告書』第30集）　青森市教育委員会
㈶北海道埋蔵文化財センター編　1995　『七飯町　大中山13遺跡(2)』（『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第93集）
1996　『函館市　石倉貝塚』（『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第109集）
2000　『八雲町　シラリカ2遺跡』（『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第142集）
佐藤一夫・宮夫靖夫編　1984　『タッコッ ―北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』　苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財センター
佐藤忠雄編　1978　『奥尻島米岡第2遺跡』　奥尻町・奥尻町教育委員会
佐藤宏之　1995　「技術的組織・変形論・石材受給―下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察―」『考古学研究』通巻165号　考古学研究会編集委員会
柴田信一　1988　「八雲町の続縄文時代の遺跡」『ゆうらふ』第31号　八雲郷土研究会
1991　「八雲町の続縄文時代の遺跡と遺物について」『文教台考古』第6号　札幌学院大学考古学研究会
鈴木　守・藤原哲夫・三谷勝利　1967　『長万部町の地質』　長万部町
芹沢長介　1974　『碁石遺跡』社教シリーズ第17集　大船渡市教育委員会社会教育課
高橋和樹・内山真澄・土田亜佐子ほか　1976　『瀬棚南川遺跡』　瀬棚町教育委員会
高橋正勝編　1980　『アヨロ遺跡―続縄文（恵山式土器）文化の墓と住居址―』　北海道先史学協会
高橋正勝　1984　「北海道中央部の続縄文時代―江別の恵山式土器群と江別太式・坊主山式土器群―」『北海道の研究』第1巻　考古篇　清文堂
竹岡俊樹　1989　『石器研究法』　言叢社
千代　肇　1965　「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯　北海道考古学会
1984　『続縄文文化』考古学ライブラリー25　ニューサイエンス社
1984　『続縄文時代の生活様式』考古学ライブラリー29　ニューサイエンス社
寺崎康史　1990　『神丘2遺跡』今金町文化財調査報告2　今金町教育委員会
戸苅賢二・土屋　薫　2000　『北海道の石』北海道大学図書刊行会
友田哲弘　1996　「小形原石産出地における石材の活用について―上川盆地の遺跡における「ピエス・エスキーユ」を例に―」『北海道考古学』第32輯　北海道考古学会
永田方正　1984　『初版　北海道蝦夷語地名解　復刻版』　株式会社草風館
野村　崇　1982　「八雲トコタン2遺跡」『北海道における農耕の起源（予報）―文部省科学研究費によるー』　梅原達治
原田準平・針谷　宥　1984　『北海道鉱物誌』　北海道立地下資源調査所
東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会編　2000　『第9回　東日本埋蔵文化財研究会　福島大会　東日本弥生時代後期の土器編年』　第2分冊　東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会

八雲町教育委員会編　1987 a　『栄浜 1 遺跡』　八雲町教育委員会
1987 b　『台の上遺跡』　八雲町教育委員会
1988　『山越 5 ・ 6 遺跡発掘調査報告書』　八雲町教育委員会
1998　『大新遺跡』Ⅱ　八雲町教育委員会
八雲町史編さん委員会　1984　『改訂　八雲町史』上巻・下巻　八雲町役場
山田秀三　1984　『北海道の地名』　北海道新聞社
横山英介　2001　「河原礫と考古学」『渡島半島の考古学－南北海道情報交換会20周年記念論集－新しい視点・分野の考古学－渡島半島の考古学的検証より－』　南北海道情報交換会20周年記念論集編集委員会
吉川虎雄・杉村　新・貝塚爽平・太田陽子・阪口　豊　1973　『新編日本地形論』東京大学出版会
吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎編　1979　『聖山－北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査』七飯町教育委員会

表1　確認遺構一覧

遺構名	発掘区	平面形	規模(cm) 確認面	規模(cm) 底面	規模(cm) 深さ	出土遺物(点数) 土器	出土遺物(点数) 石器	出土遺物(点数) 自然遺物	重複関係	備考
TP-1	H52-53、I53	長楕円	360×(94)	397×23	110				P-19に切られる	
P-4	N64	不整円	78×65	43×43	18					
P-5	N63	不整円	69×(67)	62×(50)	20	縄縄文(12)				図版-1 図版20-1
P-12	I 52-153	楕円	105×74	52×16	32					
P-19	H53	楕円	110×75	70×35	27				TP-1を切る	
F-1	L62	－	160×60	－	－			炭化木片 炭化種子		
F-2	J 51	－	170×163	－	－			炭化木片 炭化種子		
Cb-1	G54	－	60×47	－	－			炭化木片 炭化種子		
Cb-2	J 66	－	190×(150)	－	－			炭化木片 炭化種子		
Cb-3	N56	－	60×40 40×23	－	－	時期不明(9)	剥片(21)	炭化木片 炭化種子		
Cb-4	M56	－	60×54 19×17	－	－			炭化木片 炭化種子		
Cb-5	L57	－	94×58	－	－		剥片(2)	炭化木片 炭化種子		
Cb-6	I 64	－	55×40	－	－			炭化木片 炭化種子		
FK-1	N57	－	(300)×240	－	－		剥片(137)			

表2　包含層出土復原土器一覧

図番号	発掘区	層位	点数	口径	底径	器高	分類	備考
Ⅳ－1－51	G55	Ⅰ	12	13	－	6.3	(9.3)	Ⅵc
	K57	Ⅰ	1					
52	S50	Ⅰ	1	3	6.0	－	(4.2)	未接合
	S51	Ⅰ	2					Ⅶ?
Ⅳ－2－4	M55	Ⅲb上	9	17	－	8.7	(14.0)	6点未接合
		Ⅲb	6					2点未接合
	N55	Ⅰ	1					Ⅳb
		Ⅲb	1					
7	J 64	Ⅰ	2	47	－	7.3	(16.0)	Ⅵb
	J 65	Ⅰ	4					1点未接合
	K64	Ⅰ	2					2点未接合
	K65	Ⅰ	6					未接合
		Ⅲa	29					2点未接合
	L62	Ⅰ	1					8点未接合
	M62	Ⅰ	1					未接合
	N66	Ⅲ	2					未接合
15	K65	Ⅲa	9	21	18.7	－	(6.8)	未接合
	L65	Ⅲa	11					Ⅵb
	不明	Ⅲ	1					未接合
21	G55	Ⅰ	1	22	21.2	－	(6.7)	Ⅵc
		Ⅲb上	3					
	G56	Ⅰ	1					
	H54	Ⅰ	1					
	H55	Ⅰ	4					
	H56	Ⅰ	5					未接合
		Ⅲ	4					
	H57	Ⅰ	1					
	I 54	Ⅰ	1					未接合
	N58	Ⅰ	1					
33	J 65	Ⅰ	1	7	－	15.5	(4.1)	未接合
	J 66	Ⅰ	1					未接合
	L65	Ⅲa	5					Ⅵc
34	N56	Ⅰ	1	2	－	6.3	(2.9)	Ⅵc
		Ⅳ	1					

表3　包含層出土掲載土器一覧

図番号	発掘区	層位	分類	図番号	発掘区	層位	分類
Ⅳ－1－1	R50	Ⅰ	Ⅳb	Ⅳ－1－46	O56	Ⅰ	Ⅵc
2	H52	〃	Ⅳ～Ⅴ	47	M58	〃	〃
3	L61	〃	〃	48	G61	〃	〃
4	L63	〃	Ⅵb	49	O59	〃	〃
5	O63	〃	〃	50	M56	〃	〃
6	J55	〃	〃	Ⅳ－2－1	H52	Ⅲb上	Ⅳa
7	L63	〃	〃	2	H52	〃	〃
8	M57	〃	〃	3	O52	Ⅲ下	Ⅳb
9	K60	〃	〃	5	N66	Ⅲ	Ⅵb
10	O63	〃	〃	6	K65	Ⅲa	〃
11	L57	〃	〃	8	N56	Ⅲ	〃
12	L57	〃	〃	9	M55	Ⅲb上	〃
13	N58	〃	〃	10	M56・N56	Ⅳ・Ⅲ	〃
14	L56	〃	〃	11	J64	Ⅲa	〃
15	O63	〃	〃	12	N56	Ⅲ	〃
16	O56	〃	〃	13	N57	〃	〃
17	N56	〃	〃	14	N56	〃	〃
18	O58	〃	〃	16	N66	Ⅰ	Ⅵc
19	J53	〃	〃	17	M65	〃	〃
20	I53	〃	〃	18	K50	Ⅲb	〃
21	M64	〃	〃	19	M52	Ⅰ	〃
22	J65	〃	〃	20	N56	Ⅲ	〃
23	L56	〃	Ⅵd	22	J66	Ⅰ・Ⅳ	〃
24	S51	〃	Ⅵc	23	J54	Ⅲ	〃
25	R51	〃	〃	24	J54・K54	Ⅰ	〃
26	S50	〃	〃	25	J54	〃	〃
27	S51	〃	〃	26	L64	Ⅲa	〃
28	N61	〃	〃	27	H57・K58	Ⅰ・Ⅲ	〃
29	K60	〃	〃	28	N56	Ⅲb	〃
30	O52	〃	〃	29	N56	Ⅳ	〃
31	K58	〃	〃	30	L65	Ⅲa	〃
32	G55	〃	〃	31	N56	Ⅲ	〃
33	N58	〃	〃	32	N56	〃	〃
34	N56・N57	〃	〃	35	G55	Ⅲa	〃
35	K58	〃	〃	36	J50	Ⅳ	〃
36	K58・M58	〃	〃	37	I54	Ⅰ	〃
37	N61・O62	〃	〃	38	H54	Ⅲb	〃
38	L62	〃	〃	39	H54	Ⅰ	〃
39	K60・M60	〃	〃	40	H54	〃	〃
40	L66	〃	〃	41	H54・I55	Ⅰ・Ⅲ	〃
41	O58	風倒	〃	42	G55・H54	Ⅰ	〃
42	S51	Ⅰ	〃	43	G55・H56	Ⅰ・Ⅲ	〃
43	J64・K64	〃	〃	44	S51	Ⅲb	〃
44	M57	〃	〃	45	S50	〃	〃
45	M64	〃	〃				

表4　包含層出土掲載石器一覧

挿図	番号	図版番号	調査区	層位	遺物番号	器種名	石材	残存(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合番号	備考
図Ⅳ-4	1	17-1	M62	Ⅰ	1	石鏃	黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.6		
図Ⅳ-4	2	17-2	M55	Ⅰ	1	石鏃	頁岩	2.3	1.5	0.3	0.6		
図Ⅳ-4	3	17-3	L63	Ⅰ	1	石鏃	頁岩	(2.0)	(1.6)	0.3	(0.8)		
図Ⅳ-4	4	17-4	S51		13	石鏃	黒曜石	(1.6)	1.7	0.3	(0.7)		
図Ⅳ-4	5	17-5	K65		32	石鏃	頁岩	(2.3)	1.6	0.3	(0.9)		
図Ⅳ-4	6	17-6	K60	Ⅳ	1	石鏃	頁岩	2.7	(1.5)	0.4	1.3		
図Ⅳ-4	7	17-7	L55	Ⅰ	1	石鏃	黒曜石	(1.5)	1.3	0.3	(0.7)		
図Ⅳ-4	8	17-8	L62		2	石鏃	黒曜石	(2.0)	2.0	0.6	(1.6)		
図Ⅳ-4	9	17-9	S51	Ⅰ	1	石鏃	頁岩	(1.4)	1.8	0.4	0.6		
-	-	17-10	N57	Ⅲb	2	石鏃	黒曜石	(0.9)	1.3	(0.2)	(0.3)		挿図未掲載
図Ⅳ-4	10	17-11	S50		7	石鏃	頁岩	2.0	(1.8)	0.3	(1.1)		
図Ⅳ-4	11	17-12	N56		83	石鏃	頁岩	(1.4)	1.8	0.5	(2.0)		
図Ⅳ-4	12	17-13	H52	Ⅰ	1	石鏃	頁岩	(3.2)	1.5	0.6	(1.7)		
図Ⅳ-4	13	17-14	K53	Ⅰ	1	石鏃	頁岩	3.8	1.5	0.5	2.1		
図Ⅳ-4	14	17-15	N57		8	石鏃	黒曜石	(2.1)	(1.2)	(0.4)	(0.7)		
図Ⅳ-4	15	17-16	L55		1	石錐	頁岩	5.1	2.7	1.2	16.0		
図Ⅳ-4	16	17-17	L53	Ⅰ	1	石錐	黒曜石	(5.1)	1.5	0.9	(6.3)		
図Ⅳ-4	17	17-18	M59	Ⅰ	1	掻器	頁岩	4.6	3.6	1.2	18.5		
図Ⅳ-4	18	17-19	O59	Ⅰ	2	スクレイパー	頁岩	4.0	1.6	0.5	2.6		
図Ⅳ-4	19	17-20	J66		3	スクレイパー	頁岩	6.3	3.4	0.9	16.0		
図Ⅳ-4	20	17-21	M58	Ⅰ	1	スクレイパー	頁岩	(6.2)	2.3	1.0	(8.8)		
図Ⅳ-4	21	17-22	M52	Ⅳ	3	スクレイパー	玉髄	5.5	2.3	0.6	6.9		
図Ⅳ-4	22	17-23	K66		1	スクレイパー	頁岩	6.1	3.5	1.0	12.7		
図Ⅳ-4	23	17-24	J59	Ⅰ	1	スクレイパー	頁岩	(3.9)	2.5	0.7	(7.9)		
図Ⅳ-4	24	17-25	I52	Ⅰ	1	スクレイパー	頁岩	8.5	4.1	2.4	69.4		
図Ⅳ-4	25	17-26	K61	Ⅰ	1	スクレイパー	頁岩	3.7	1.6	1.0	6.7		
図Ⅳ-4	26	17-27	M65		2	スクレイパー	頁岩	5.4	5.0	1.3	26.0		
図Ⅳ-4	27	17-28	G65	Ⅰ	1	スクレイパー	頁岩	2.7	4.9	0.8	8.6		
図Ⅳ-5	28	17-29	N63	Ⅰ	1	両面調整石器	頁岩	5.1	5.1	1.6	43.9		
図Ⅳ-5	29	17-30	G57		1	両面調整石器	黒曜石	3.5	4.0	1.5	16.0		
図Ⅳ-5	30	17-31	J53	Ⅰ	1	両面調整石器	頁岩	3.8	2.7	1.2	10.6		
図Ⅳ-5	31	18-36	M65	Ⅰ	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	1.3	0.9	0.7	0.7		
図Ⅳ-5	32	18-37	K60	Ⅰ	4	ピエス・エスキーユ	玉髄	1.6	2.1	0.6	1.4		
図Ⅳ-5	33	18-38	M52		2	ピエス・エスキーユ	頁岩	3.2	2.2	0.8	2.3		
図Ⅳ-5	34	18-39	O64	Ⅰ	2	ピエス・エスキーユ	頁岩	3.4	2.7	0.9	5.5		
図Ⅳ-5	35	18-40	K65	Ⅰ	1	ピエス・エスキーユ	黒曜石	3.6	2.5	1.4	7.7		
図Ⅳ-5	36	18-41	M58		2	ピエス・エスキーユ	黒曜石	2.1	(3.3)	0.9	(4.2)		
-	-	18-42	M63	Ⅰ	4	ピエス・エスキーユ	頁岩	3.0	2.9	0.6	5.1		挿図未掲載
図Ⅳ-5	37	18-43	L67		3	ピエス・エスキーユ	玉髄	1.4	1.2	0.4	0.7		
図Ⅳ-5	38	18-44	H56	Ⅲ	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	2.1	2.2	1.0	5.5		
-	-	18-45	N57	Ⅲ	3	ピエス・エスキーユ	頁岩	2.4	1.1	0.4	1.2		挿図未掲載
図Ⅳ-5	39	18-46	O64	Ⅰ	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	2.7	3.3	1.9	14.0	1003	挿図番号61と接合
図Ⅳ-5	40	18-47	H64	Ⅰ	1	ピエス・エスキーユ	頁岩	4.3	3.7	1.2	14.3		
-	-	18-48	O58	Ⅰ	3	ピエス・エスキーユ	頁岩	1.2	(2.0)	0.6	1.2		挿図未掲載
図Ⅳ-5	41	18-49	S50	Ⅰ	1	ピエス・エスキーユ	頁岩	(2.0)	2.0	0.4	(1.4)		

表4　包含層出土掲載石器一覧

挿図	番号	図版番号	調査区	層位	遺物番号	器種名	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合番号	備考
-	-	18-50	M62	I	6	ピエス・エスキーユ	貫岩	3.0	2.1	0.5	3.0	2006	縄図未掲載
-	-	18-50	R51	I	8	ピエス・エスキーユ	貫岩	-	-	-	-	2006	縄図未掲載
図IV-5	42	18-51	L62	I	1	ピエス・エスキーユ	貫岩	2.1	1.8	0.5	2.2		
図IV-5	43	18-52	H60	I	1	ピエス・エスキーユ	貫岩	2.2	2.8	0.7	3.5		
図IV-5	44	18-53	S50		6	ピエス・エスキーユ	貫岩	3.5	2.8	0.9	6.8		
図IV-5	45	18-54	M63	I	2	ピエス・エスキーユ	貫岩	3.8	2.6	0.9	6.8		
図IV-5	46	18-55	M61	I	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	3.4	2.6	1.0	8.7		
図IV-5	47	18-56	L67		2	ピエス・エスキーユ	玉髄	2.9	2.1	0.9	4.9		
図IV-5	48	18-57	J67	I	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	2.1	2.0	0.9	4.1	1005	縄図番号63と接合
図IV-5	49	18-58	M60	I	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	4.3	1.7	1.3	9.1		
図IV-5	50	18-59	O62	I	1	ピエス・エスキーユ	玉髄	4.9	2.7	1.3	19.7		
図IV-5	51	18-60	L53	I	2	ピエス・エスキーユ	玉髄	4.1	3.2	1.9	27.7		
	-	18-61	L51	I	2	ピエス・エスキーユ	貫岩	3.1	1.7	1.0	3.6		縄図未掲載
図IV-5	52	18-62	H56	I	5	ピエス・エスキーユ	玉髄	2.8	2.4	1.6	10.5		
-	-	18-63	J60	I	1	剥片	貫岩	2.3	1.0	0.5	0.8		縄図未掲載
-	-	18-64	M62	I	4	剥片	貫岩	2.0	0.7	0.3	0.4		縄図未掲載
-	-	18-65	M62	I	5	剥片	貫岩	2.9	0.8	0.6	1.7		縄図未掲載
図IV-6	53	17-32	K53	I	2	Rフレイク	貫岩	3.1	3.1	1.3	14.5		
図IV-6	54	17-33	S51	I	2	Rフレイク	玉髄	4.9	3.5	0.9	11.6		
図IV-6	55	17-34	H59	I	1	Rフレイク	貫岩	3.2	6.1	1.4	24.4		
図IV-6	56	17-35	N57		7	Rフレイク	黒曜石	1.8	1.6	(0.6)	(1.7)		
図IV-6	57	18-66	J56	I	1	石核	貫岩	54.9	61.7	70.2	233.3	1006	縄図番号65と接合
図IV-6	58	18-67	M66	I	1	石核	貫岩	4.5	7.1	3.3	128.9		
図IV-6	59	18-68	N57	I	1	石核	貫岩	4.3	4.9	2.8	49.7		
図IV-6	60	18-69	L56	I	5	石核	玉髄	3.0	3.4	2.8	32.5	1002	縄図番号64と接合
図IV-6	61	18-70	L61	I	3	石核	玉髄	4.8	5.8	4.6	100.8	1003	縄図番号39と接合
図IV-6	62	18-71	H56	I	2	石核	玉髄	45.9	46.8	54.1	100.5	1001	J59-I-2と折れ接合
図IV-6	62	18-71	J59	I	2	石核	玉髄	-	-	-	-	1001	H56-I-2と折れ接合
図IV-6	63	19-1-72	M53	I	7	剥片	玉髄	1.9	0.8	0.2	0.3	1005	縄図番号48と接合
図IV-6	64	19-2-73	I56	I	4	剥片	玉髄	2.5	2.1	1.0	5.4	1002	縄図番号60と接合
図IV-6	65	19-3-74	M53	I	5	剥片	貫岩	3.2	1.9	0.7	2.9	1006	縄図番号67と接合
図IV-7	66	19-4-75	H56	I	3	剥片	玉髄	3.7	5.6	3.4	67.0	1001	縄図番号62と接合
図IV-7	67	19-5-76	I57		1	原石	玉髄	12.6	8.2	3.5	344.6		
図IV-7	68	19-5-77	L65		16	原石	玉髄	15.0	7.8	4.4	426.4		
図IV-7	69	19-5-78	G55	I	1	原石	玉髄	8.5	7.8	4.1	260.0		
図IV-7	70	19-5-79	N56	I	1	石斧	緑色泥岩	6.9	3.6	1.3	48.4		
図IV-8	71	20-80	N65		2	すり石	安山岩	14.0	8.8	3.4	418.4		
図IV-8	72	20-81	N60	I	1	すり石	砂岩	11.0	9.6	3.5	530.4		
図IV-8	73	20-82	N56		128	すり石	安山岩	11.7	10.9	5	932.0		
図IV-8	74	20-83	H56	I	4	すり石	砂岩	16.8	7.5	2.3	420.0		
図IV-8	75	20-84	L61	I	1	敲石・すり石	砂岩	(10.0)	(11.0)	(4.8)	(852.0)		
-	-	20-85	M63	I	1	すり石	砂岩	(10.9)	(9.0)	(4.8)	622.0		縄図未掲載
図IV-8	76	20-86	J52	I	1	すり石	砂岩	(11.4)	14.2	(6.1)	(1495.0)		
-	-	20-87	K60	I	2	台石	砂岩	17.6	12.9	4.6	1590.0		縄図未掲載

1．発掘前風景（西から）

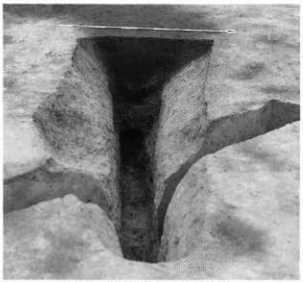
2．調査状況（北西から）

図版 2

1．土層堆積状況（北東から）

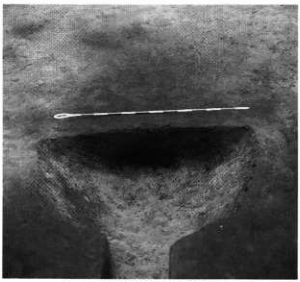
2．遺構調査状況（南から）

3．ＴＰ-１・Ｐ-19検出状況（南から）

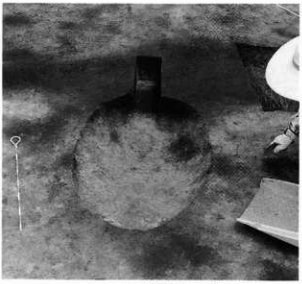


4．ＴＰ-１土層堆積断面（南から）

1．ＴＰ－１完掘状況（南から）

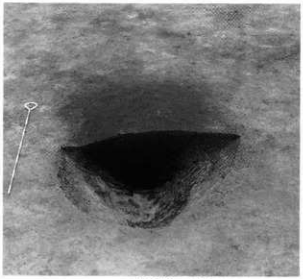


2．Ｐ-19土層断面（東から）

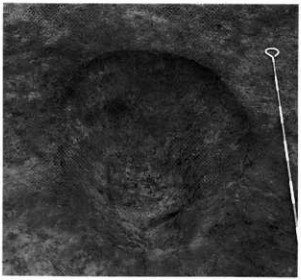


3．Ｐ-19完掘状況（西から）

4．Ｐ-12検出状況（東から）



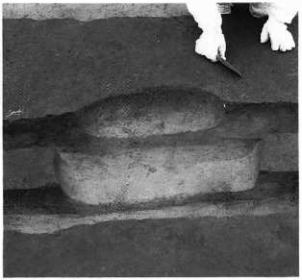
5．Ｐ-12土層断面（南東から）



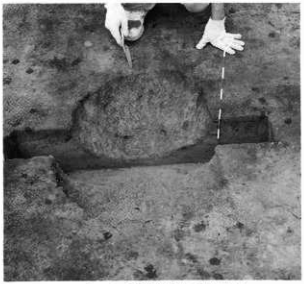
6．Ｐ-12完掘状況（東から）

図版 4

1．P－5土層断面（北西から）



2．P－5完掘状況（南東から）



3．P－4完掘状況（南東から）

4．F－1検出状況（北西から）

5．F－1土層断面（南東から）

6．Cb－5検出状況（東から）

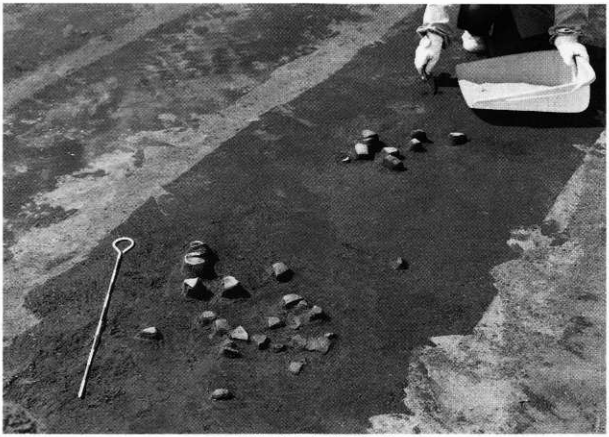
1．M・N56区　遺物出土状況（北から）

2．M・N56区　遺物出土状況（南から）

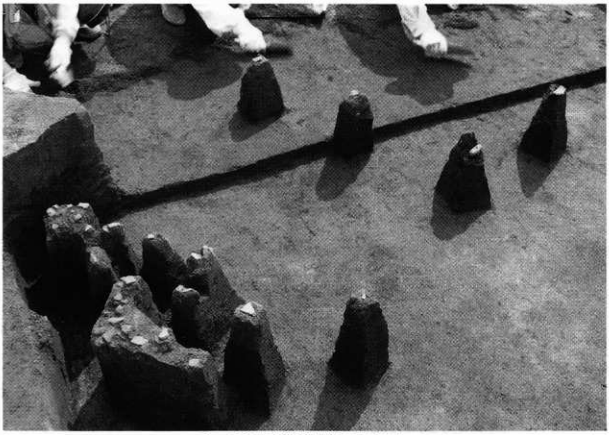
図版 6

1．N57区　フレイク集中（南から）

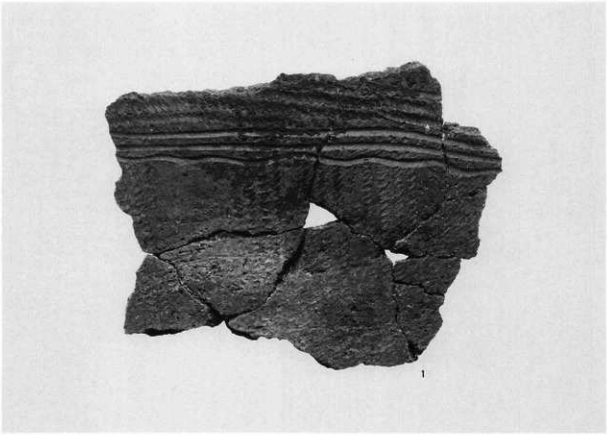
2．L 65区　遺物出土状況（Ⅵ群土器・玉髄原石）（東から）



1．K65区　遺物出土状況（Ⅵ群土器）（南西から）



2．M66区　遺物出土状況（南から）



1．遺構出土土器、2～4．包含層出土土器(1)

1

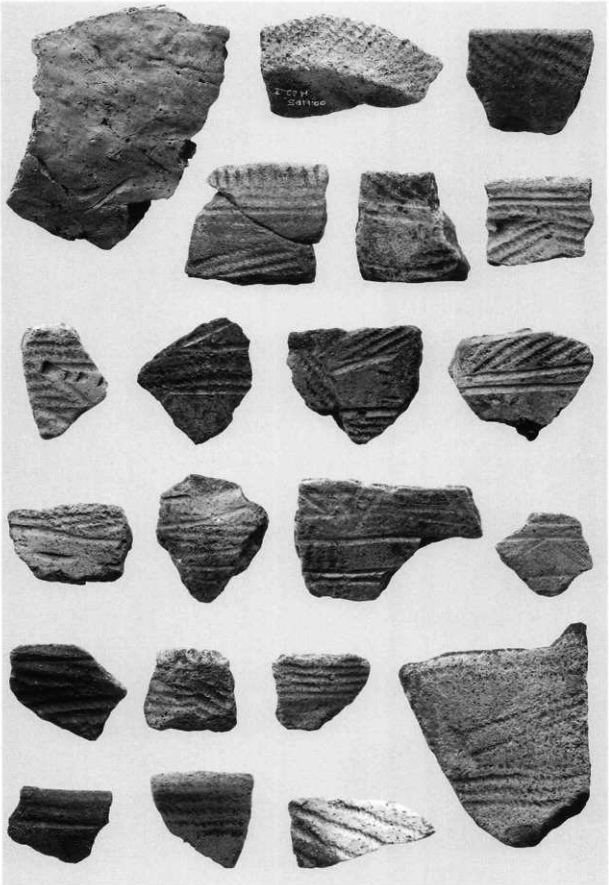
2

3

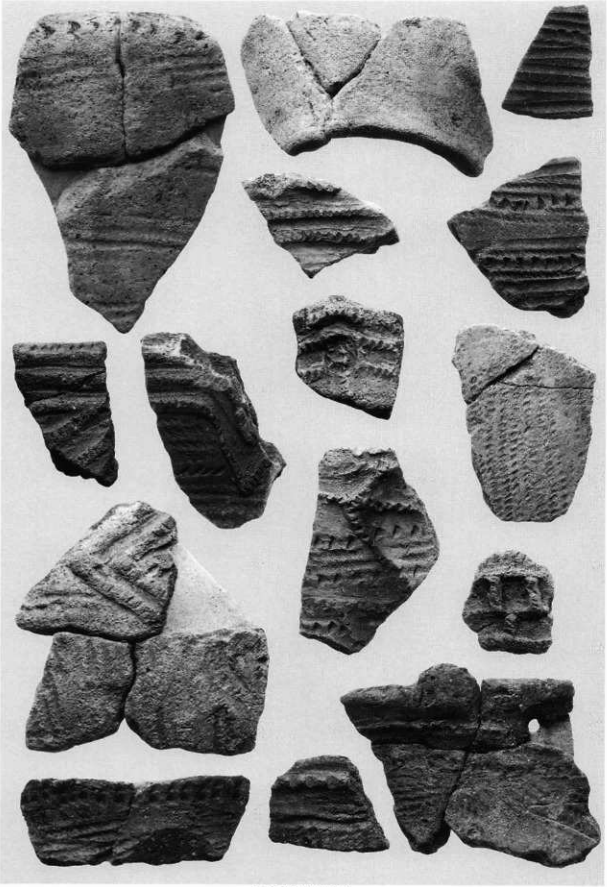
5

4

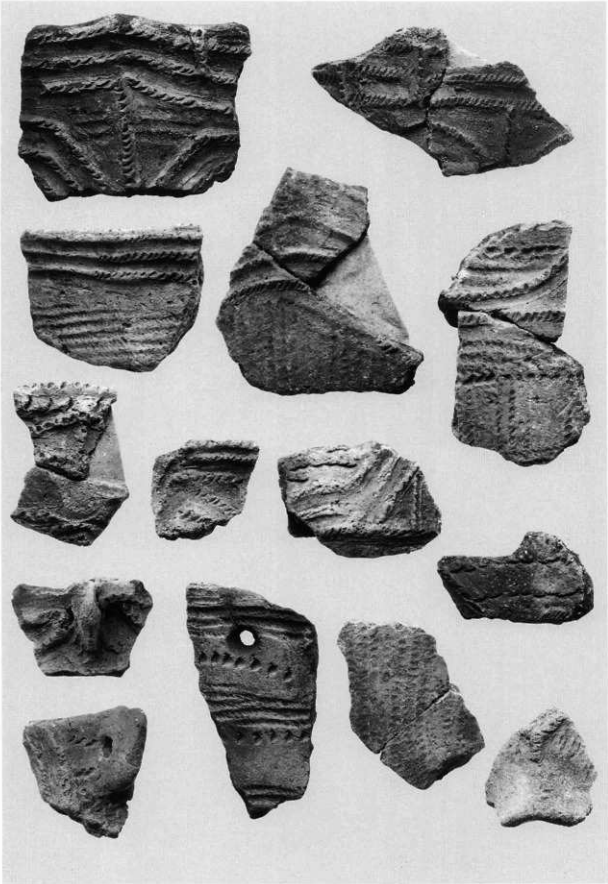
包含層出土土器(2)



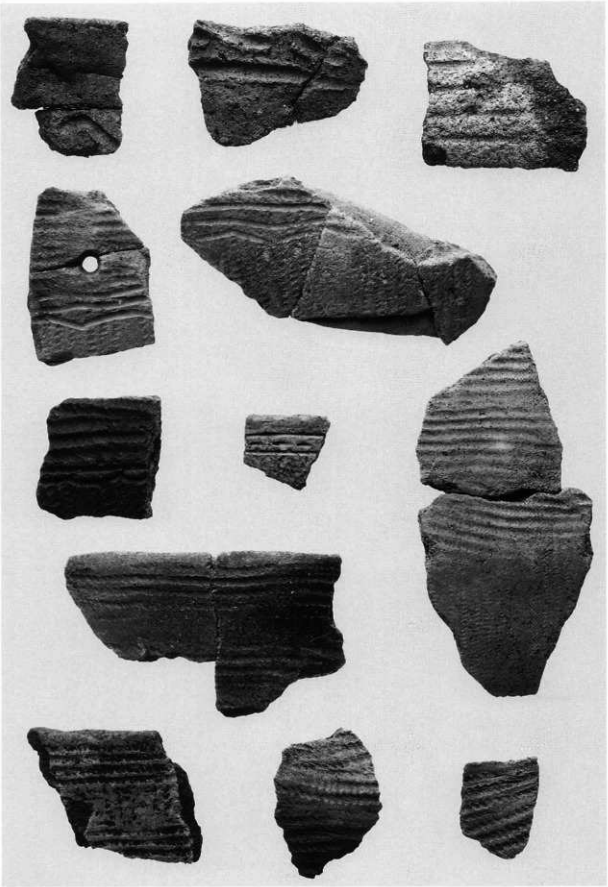
包含層出土土器(3)



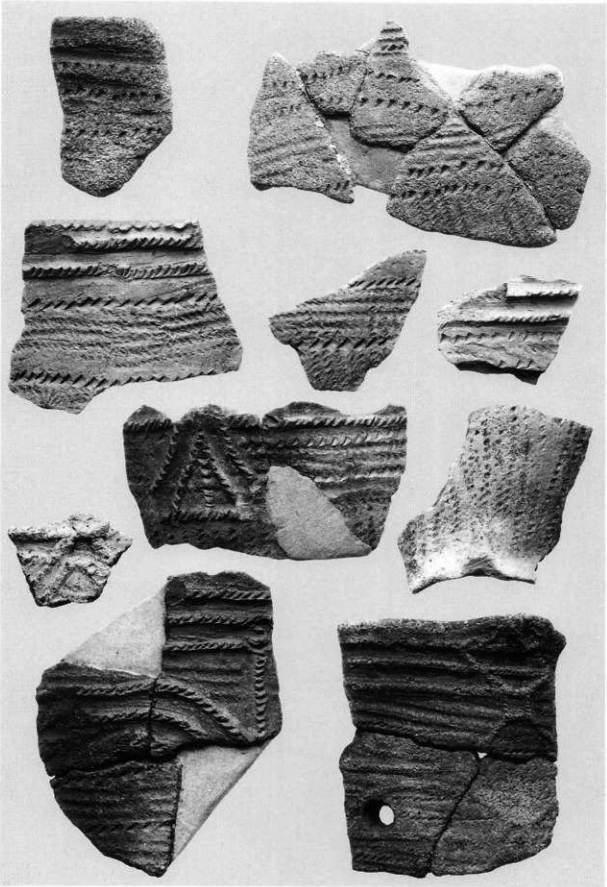
包含層出土土器(4)



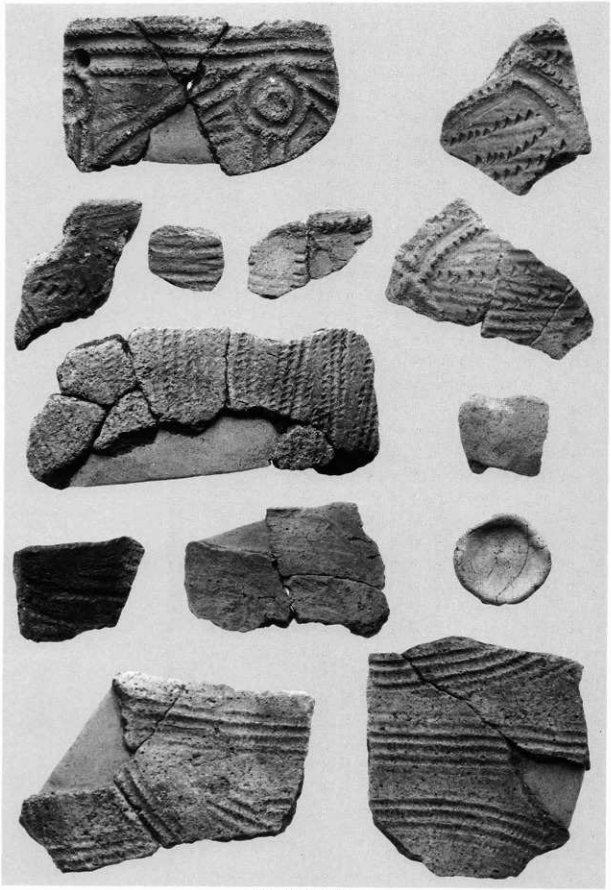
包含層出土土器(5)



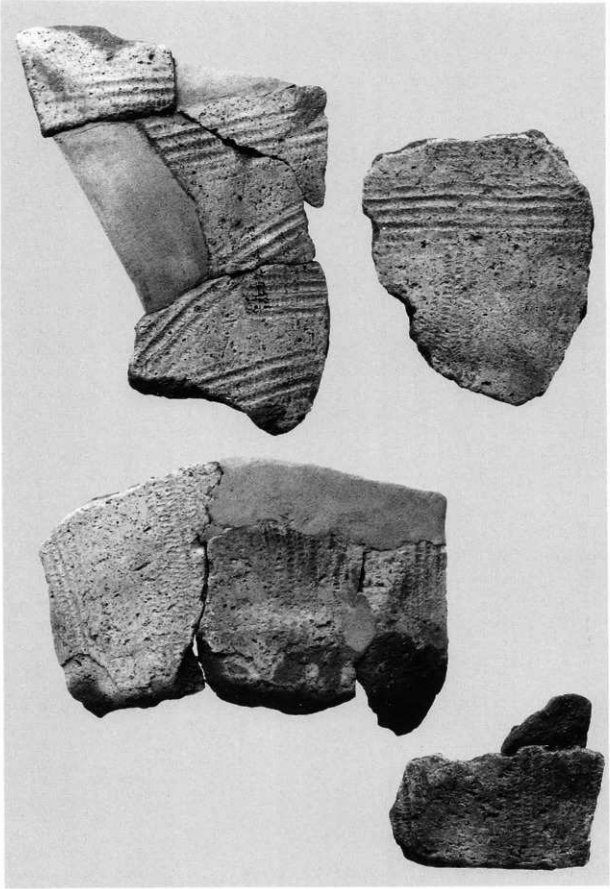
包含層出土土器(6)



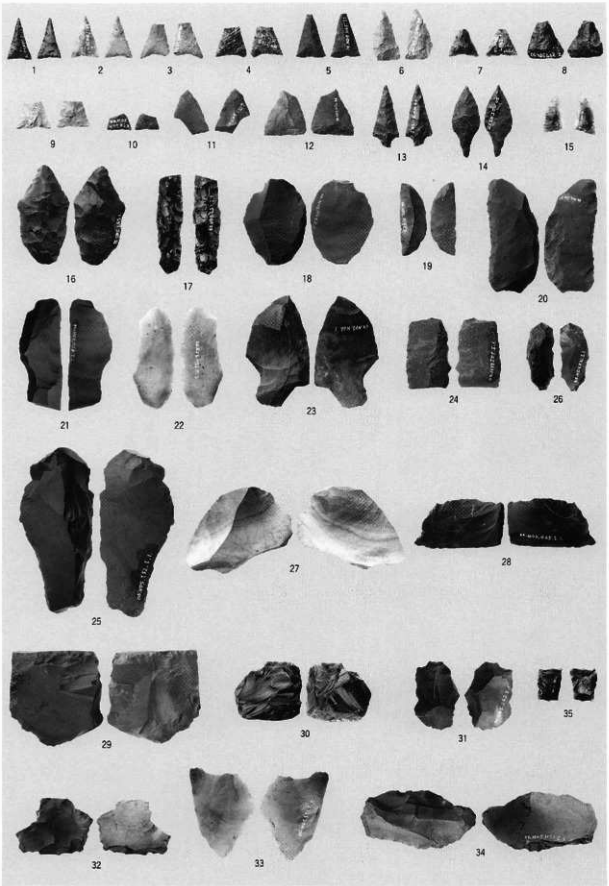
包含層出土土器(7)



包含層出土土器(8)

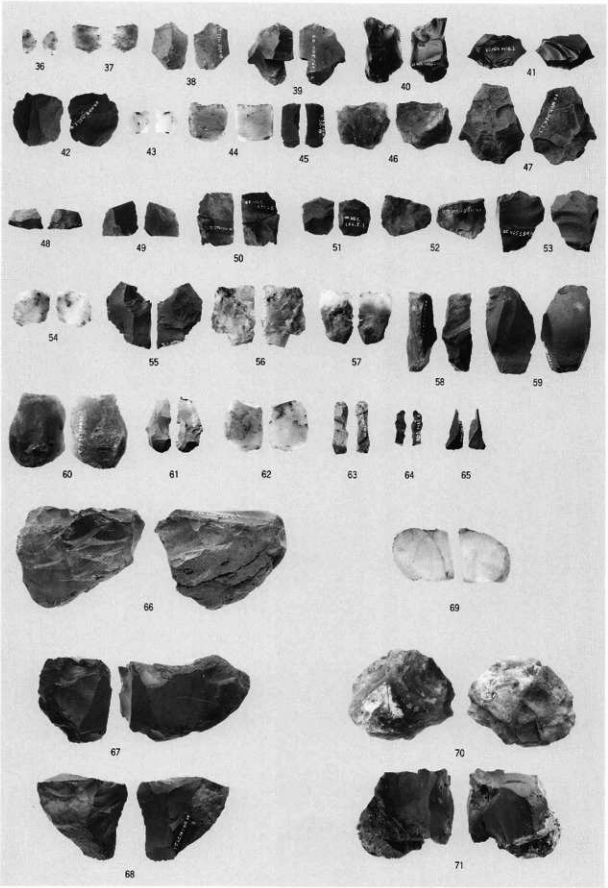


包含層出土土器(9)

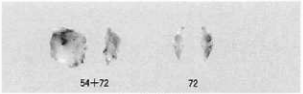


石鏃、石槍、掻器、スクレイパー、Rフレイク

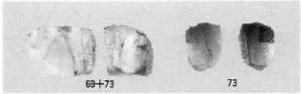
図版18



ピエス・エスキーユ、石核

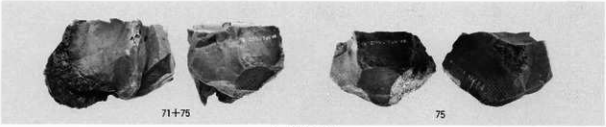


1．接合1005

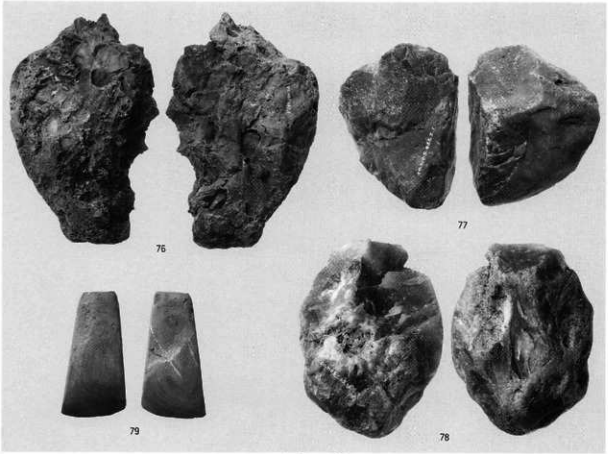


2．接合1002

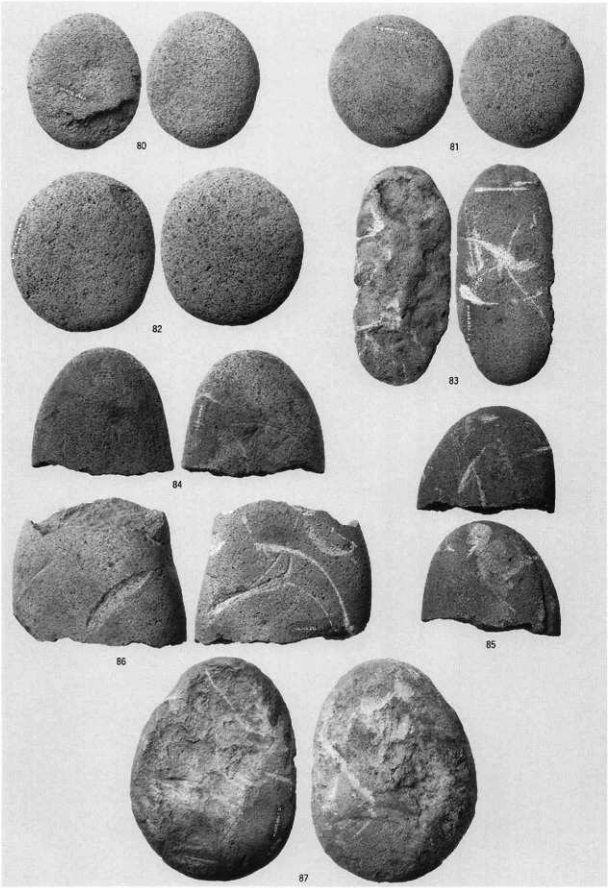
3．接合1006



4．接合1001



5．原石、石斧



すり石、石皿・台石

報告書抄録

ふりがな	やくもちょう のだおいせいせき
書名	八雲町　野田生５遺跡
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第164集
編著者名	中田裕香・坂本尚史
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069—0832　北海道江別市西野幌685—1　TEL011—386—3231
発行年月日	西暦2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
のだおいせいせき 野田生５遺跡	はっかいどう 北海道 やまこしぐん 山越郡 やくもちょう 八雲町 のだおい 野田生 303他	1346	B-16-51	42° 13′ 1″	140° 22′ 0″	20000508 ～ 20000814	2,230	道路建設 （北海道縦貫自動車道）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野田生５遺跡	遺物包含地	縄文時代 続縄文時代	Ｔピット　１基 土　壙　４基 焼土・炭化木片ブロック　８基 フレイク集中　１か所	縄文土器 （大津式、手稲式） 続縄文土器 （恵山式、後北Ｂ式、後北C_2・Ｄ式） 弥生系土器 擦文土器 石器等 （石鏃、石槍、掻器、スクレイパー、両面調整石器、ピエス・エスキーユ、Ｒフレイク、剥片、石核、石斧、たたき石、すり石、石皿・台石、礫）	

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第164集

八雲町　野田生５遺跡

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年３月30日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069－0832　江別市西野幌685番地1
☎011(386)3231　FAX011(386)3238
印　　刷　株式会社　キサツ
〒064－0921　札幌市中央区南21条西10丁目
☎011(531)2111　FAX011(512)3555